

日本における市民社会という語句

—— テキストマイニングによる一観念史 ——

左 古 輝 人*

1 序

1. 1 はじめに

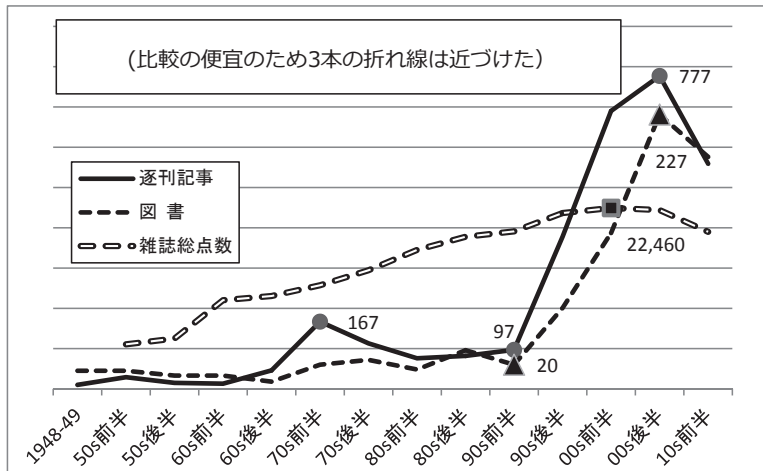
本稿は、日本語の図書の題目および逐次刊行物（以下、逐刊と略記）の記事題目に出現した語句「市民社会」が1935年から2018年までに辿った意味と意義の変遷過程を、主にテキストマイニングの技法により分析、考察する。ここで題目とは、国立国会図書館NDLOPACおよび国立情報学研究所Webcat Plusにおけるタイトル検索で検索語「市民社会」によりヒットしたものを指す。図書の題目は、目次およびオビの文言を含む。¹⁾

図書だけでなく逐刊記事を併用するのは、そのほうが1点1点の偶発的事実が全体に及ぼす影響を小さくでき、経時的な趨勢を的確に検出するのに有利なためだ。【図1】が示すように逐刊記事の件数は図書の約3倍に及ぶ。また、逐刊記事を掲載するチャンスは図書の刊行には馴染まない広範な人々——各種の実践家、実務家、専門家など——に開かれており、言わば言論の裾野を可視化するのに有効と考えられる。

対象を学術書、学術論文に限らないのは、日本の公的言論の全体における市民社会を捉えるためである。市民社会の学術内における使用、特に社会思想・

1) 厳密には、図書には、国際標準図書番号（いわゆるISBN）を有さないもの——科研費報告書や私家本など——を含む。なお、WEBCAT Plusに付随する「BOOK データベース」——（株）トーハン、日本出版販売（株）、（株）紀伊國屋書店、日外アソシエーツ（株）が共同構築している書誌情報データベース——の書誌情報を利用した。ただしこれはすべての図書ではない。傾向としては、1960年代と70年代については、目次もオビ文言もないケースが多い。逐刊記事の題目には特集の題目における出現を含む。

* SAKO, Teruhito 首都大学東京人文科学研究科 教授 telsako@tmu.ac.jp



【図1】日本の市民社会言論の量的変遷

社会科学の巨匠たちによる諸使用の経緯については、すでに渡辺雅男（2009）、小野寺研太（2015）、渡邊憲正（2017）などに詳しい。その一方で、数量的にはそれら巨匠たちを圧倒的に凌駕する非＝巨匠たちの言論群、および、学術との関わりが薄い言論群を含めた総体としての日本の公的言論全体において、市民社会が何として理解され、その理解がどう変遷し、何と関連付けられてきたかについては必ずしも十分に検討されていない。管見のかぎり唯一の例外は、逐刊記事を広く収集・分析した大畑裕嗣（2015）である。

大畑（2015）説を要約すると、あらまし次のようである。日本の人文社会科学およびジャーナリズムにおける市民社会は、1990年代後半における言及数の急増を分水嶺として、それ以前とそれ以後では論じられ方に大きな相違がある。90年代後半以前には日本の市民社会の不在、奇形性、脆弱性が論じられた。その実在が明言される場合でも、それは大衆社会の同義語として、或いは戦前には国家と家にほぼ吸収され尽くしていた日本人の集団生活に、戦後に生じた第3領域、すなわち非＝民主で前近代的な会社・企業として、批判的に扱われていた。他方、90年代以降、日本の市民社会はNPO、NGO、各種ボランティア団体として、あるいはそれらの総称として、実在する前提で論じられ

ようになった。この背景には政府開発援助の増大およびそれにとまなう非政府団体の活性化、阪神・淡路大震災における災害救援ボランティア活動の広がりなどがある。目下、市民社会に関する人文社会科学およびジャーナリズムにおける議論の総体は、a) こうした新しい市民社会を肯定的に捉える立場、b) こうした新しい市民社会が新自由主義的文脈に規定されていることを批判的に捉える立場、そしてc) 営利企業としての戦後日本の市民社会の克服を課題とする立場から成る。

本稿は大畑（2015）説が市民社会に関する日本の公的言論全体の有様の要約として総じてかなり高い妥当性を有することを確かめながら、事実を挙げて必要な諸知見を加える。

1. 2 テキストマイニングについて

特に1980年代末インターネットの民間利用が本格的に始まって以降、私たちが入手できる情報は増大するばかりだ。それに伴い、手作業では読み通すのが不可能な膨大な情報を一定の基準に従い分類したり、使い手の意図に応じ適切な情報を濾し取ったりする技術も長足の発展を遂げてきた。日本語においては2000年に前後し計算機を用いた自然言語の形態素分析の技術が実用に足る水準に達し、それまで高度な熟練を要した内容分析や或る種の談話分析が、民生用の安価な計算機と有償・無償の各種プログラムを用い、以前より容易におこなえるようになった。

近年こうした自然言語処理技術のうち、自然言語で書かれた文を、語句の出現頻度と共起頻度の計測を起点として分析、考察する諸手法がテキストマイニングと総称されるようになり、この技術の学術的活用も珍しくはなくなった。国立情報学研究所の学術論文データベース CiNii を検索語「テキストマイニング」により検索すると、題目に「テキストマイニング」を含む日本語学術記事は98年（6件）に初めて出現して以降、ほぼ一本調子で増え続け、2017年には年間264件が登録されている（2018年10月現在）。社会学に深く関連する研究諸領域でも樋口耕一（2004）と齋藤圭介（2013）に特筆すべき先駆的事例が見え、2017年には『社会学評論』がテキストマイニングの特集を組むに至るなど、1つの方法として定着の局面に入る動きもみられるようになってきた。

本稿では国立国会図書館 NDLOPAC および国立情報学研究所 Webcat Plus におけるタイトル検索で検索語「市民社会」によりヒットした 4,273 件（図書 989 件，逐刊記事 3,284 件）の題目から成るコーパスを，題目を単位として分析し，市民社会がどのような時期にどの程度言及されたか，また他のいかなる語句とどれほど頻繁に共起したてきたかを，テキストマイニングツール SPSS/IBM Textanalytics for Surveys を用い計測する。

テキストマイニングをこうした研究に活用する利点は数多いが，大きい点を 3 つだけ挙げれば，第 1 に手作業では探知困難な各時期の諸特徴を量的に検出できる点，第 2 に公開データさえ入手すれば誰でも本稿の知見を検証できる上に，知見を導いた過程をも検証できる点，そして第 3 に，そうすることで今後の関連諸研究の発展に堅実に資する点がある。詳しくは左古輝人（2017）を参照されたい。

2 基礎的事実

まず題目に「市民社会」という語句を含む図書と逐刊記事の件数を時系列で示すと【図 1】の通りだ。NDLOPAC および Webcat Plus による限り，市民社会の初出は図書題目において 1935 年，逐刊記事題目において 1948 年であり，その件数は 70 年代前半までにかけて概ね増え続けた。その後 70 年代後半から減少に転じ，80 年代いっぱい微減した。90 年代に状況は一変し，特に 90 年代後半以降は激増した。その後も 00 年代を通して増え続け，現在に至る。【図 1】には比較指標として，雑誌出版総点数の推移を重ねた。²⁾ 雑誌出版総点数の増減と市民社会逐刊記事の増減に見るべき相関はない，つまり市民社会逐刊記事の盛衰は印刷メディア全体の盛衰と強い関係を有さない。冗長を避けるために割愛したが，図書についても同じことが言える。

【図 2】は日本の市民社会言論のなかで出現した語句のうち最頻出 30 位前後

2) 雑誌出版総点数は『出版年鑑』（出版年鑑編集部 1948-2010）に基づき数えた。なお 48，49，51 年は『出版年鑑』の休刊期間にあたり，データが存在しない。グラフ中の折れ線は，比較の便宜のため互いに近付けた。

までを、1935年から2018年の通算、および期間毎に示した。³⁾

左端の総合順位表の上位にある語句の多くが、総じて各期間においても上位を占める傾向にあるのが分かる。その一方、網掛け太字の語句に見えるように、特定の期間においてだけ特徴的に頻出する語句もある。ここで、特徴的に頻出する、とは、図書において全体の出現率の3.5倍以上、逐刊において全体の出現率の7倍以上の頻度で出現する語句のうち、2件以上出現する語句を指す。これらの語句は市民社会言論の、各期間に特有の性質を表すと考えられる。

総合順位上位の語句うち、期間ごとの偏りが比較的少ない、つまり恒常的に出現した語句の組み合わせのなかには、時間経過にもかかわらず変化しにくい、市民社会言論の大きな主題を成しているものがあると考えられる。可能な関係様式は様々に想起され得るが、本稿は大畑（2015）説の検証をおこなう意図に基づき、『欧米思想』に注目する。「イギリス」「ドイツ」「アメリカ」などの国名、「英」「独」「米」などの略称、「マルクス」「スミス」「ファーガソン」など欧米の人名のいずれかを含む題目を日本の市民社会言論から抽出すると、『欧米思想』は図書に372件（全989件に対して約37.6%）、逐刊に785件（全3,284件に対して約23.9%）が存在する。かなり大きなシェアである。

市民社会言論の大きな主題の所在を探索するには、『欧米思想』以外にも

- 3) 【図2】の各期間の頻出語句の表記下限がバラバラなのは、各期間に同順位の語句があるためである。

【図2】は次の手続きを経て作成された。まず各期間は、前後に重複部分をあえて作っている。或る期間と、それに続く期間のあいだで生起する事象を適切に捕捉するためである。図のなかの出現数とは、当該期間において当該語句が出現した図書あるいは逐刊記事の件数を指す。頻度とは、出現件数を、当該期間における図書あるいは逐刊記事の総件数で除し、100を乗じた値である。

全体における当該語句の頻度は、単純に当該語句の出現数を図書あるいは逐刊記事の総件数で除するのではなく、各期間における当該語句の頻度を全て足し、15で除して得た、特定の期間における頻出の影響を抑制するための措置である。

特異性とは、当該語句の当該期間における頻度を、図書あるいは逐刊期の全体における当該語句の頻度で除した値である。

これを要するに、例えば「マルクス」の場合、1960年から1969年までの逐刊記事における出現数は「9」である。頻度は9を54で除して100を乗じて16.66、小数点第2位を四捨五入して「16.7」である。「マルクス」の図書全体での頻度は、各期間の「マルクス」の頻度の合計を15で除して「5.46」である。特異性は16.66を5.46で除して3.05、小数点第2位を四捨五入して「3.1」である。

| 1935-2018年の通算 | | | | | |
|---------------|-----|------|-------|-----|-----|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 歴史 | 180 | 21.5 | 国家 | 89 | 8.8 |
| 近代 | 110 | 19.4 | 問題 | 72 | 8.6 |
| 国家 | 157 | 16.8 | 法 | 81 | 8.3 |
| 法 | 138 | 16.6 | 日本 | 79 | 7.4 |
| 問題 | 146 | 15.7 | 近代 | 67 | 7.0 |
| 日本 | 244 | 15.6 | ヘーゲル | 67 | 6.7 |
| 現代 | 145 | 14.8 | 歴史 | 55 | 6.3 |
| 自由 | 100 | 14.0 | マルクス | 59 | 5.5 |
| 政治 | 150 | 12.1 | スミス | 36 | 5.1 |
| 思想 | 94 | 12.0 | 経済 | 42 | 4.9 |
| 英国 | 57 | 11.7 | 思想 | 48 | 4.8 |
| 経済 | 89 | 11.5 | 社会主義 | 67 | 4.2 |
| 世界 | 103 | 10.8 | 中心 | 38 | 4.2 |
| 資本 | 61 | 10.1 | 現代 | 58 | 4.0 |
| ヨーロッパ | 83 | 9.4 | 批判 | 25 | 3.9 |
| 成立 | 35 | 9.0 | ドイツ | 40 | 3.7 |
| ドイツ | 59 | 8.9 | 政治 | 29 | 3.6 |
| フランス | 40 | 8.2 | 考察 | 25 | 3.5 |
| 哲学 | 51 | 7.9 | 哲学 | 30 | 3.4 |
| 人間 | 54 | 7.7 | 新しい | 33 | 3.3 |
| 教育 | 78 | 7.7 | 英国 | 16 | 3.2 |
| 課題 | 117 | 7.6 | 概念 | 37 | 3.1 |
| 民主 | 109 | 7.4 | グローバル | 39 | 3.1 |
| マルクス | 43 | 7.4 | 教育 | 26 | 3.1 |
| 理論 | 69 | 7.3 | 構造 | 44 | 2.8 |
| 新しい | 124 | 7.2 | 人間 | 32 | 2.7 |
| 科学 | 46 | 7.1 | 現在 | 41 | 2.4 |
| 文化 | 89 | 6.7 | 自由 | 27 | 2.4 |
| 労働 | 51 | 6.7 | 課題 | 35 | 2.3 |
| 批判 | 50 | 6.5 | 成立 | 28 | 2.3 |

| 1935-1954年 | | | | | | | |
|------------|-----|------|------|------|-----|------|-----|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 | 特異性 |
| 歴史 | 12 | 42.4 | 2.0 | ヘーゲル | 7 | 20.0 | 3.0 |
| 近代 | 9 | 36.4 | 1.9 | 問題 | 5 | 14.3 | 1.7 |
| 国家 | 8 | 27.3 | 1.6 | スミス | 4 | 11.4 | 2.2 |
| 資本 | 7 | 24.2 | 2.4 | 近代 | 4 | 11.4 | 1.6 |
| 精神 | 7 | 21.2 | 4.0 | 法 | 4 | 11.4 | 1.4 |
| フランス | 6 | 21.2 | 2.6 | 経済 | 4 | 11.4 | 2.3 |
| 階級 | 6 | 18.2 | 15.2 | 英国 | 3 | 8.6 | 2.7 |
| 宗教 | 6 | 18.2 | 3.1 | 批判 | 3 | 8.6 | 2.2 |
| 科学 | 6 | 18.2 | 2.5 | 思想 | 3 | 8.6 | 1.8 |
| 英国 | 6 | 18.2 | 1.6 | 歴史 | 3 | 8.6 | 1.4 |
| 自由 | 6 | 18.2 | 1.3 | 系譜 | 2 | 5.7 | 4.7 |
| ドイツ | 5 | 15.2 | 1.7 | 論理 | 2 | 5.7 | 4.0 |
| 問題 | 5 | 15.2 | 1.0 | アメリカ | 2 | 5.7 | 3.7 |
| 法 | 5 | 15.2 | 0.9 | 倫理 | 2 | 5.7 | 2.9 |
| 倫理 | 4 | 12.1 | 3.3 | 自由 | 2 | 5.7 | 2.4 |
| 系譜 | 4 | 12.1 | 2.2 | 構造 | 2 | 5.7 | 2.1 |
| 人間 | 4 | 12.1 | 1.6 | 教育 | 2 | 5.7 | 1.8 |
| 成立 | 4 | 12.1 | 1.4 | 哲学 | 2 | 5.7 | 1.7 |
| 世界 | 4 | 12.1 | 1.1 | 考察 | 2 | 5.7 | 1.6 |
| 現代 | 4 | 12.1 | 0.8 | | | | |

| 1950-1959年 | | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 | 特異性 |
| 近代 | 10 | 31.3 | 1.6 | ヘーゲル | 7 | 20.0 | 3.0 |
| 歴史 | 8 | 25.0 | 1.2 | 問題 | 5 | 14.3 | 1.7 |
| 自由 | 7 | 21.9 | 1.6 | スミス | 4 | 11.4 | 2.2 |
| 国家 | 7 | 21.9 | 1.3 | 近代 | 4 | 11.4 | 1.6 |
| 系譜 | 6 | 18.8 | 3.4 | 法 | 4 | 11.4 | 1.4 |
| 労働 | 5 | 15.6 | 2.3 | 経済 | 4 | 11.4 | 2.3 |
| 教育 | 5 | 15.6 | 2.0 | 英国 | 3 | 8.6 | 2.7 |
| フランス | 5 | 15.6 | 1.9 | 批判 | 3 | 8.6 | 2.2 |
| 成立 | 5 | 15.6 | 1.7 | 思想 | 3 | 8.6 | 1.8 |
| 英国 | 5 | 15.6 | 1.3 | 歴史 | 3 | 8.6 | 1.4 |
| 危機 | 4 | 12.5 | 3.3 | 系譜 | 2 | 5.7 | 4.7 |
| スミス | 4 | 12.5 | 2.0 | 論理 | 2 | 5.7 | 4.0 |
| 科学 | 4 | 12.5 | 1.8 | アメリカ | 2 | 5.7 | 3.7 |
| ドイツ | 4 | 12.5 | 1.4 | 倫理 | 2 | 5.7 | 2.9 |
| 資本 | 4 | 12.5 | 1.2 | 自由 | 2 | 5.7 | 2.4 |
| 現代 | 4 | 12.5 | 0.8 | 構造 | 2 | 5.7 | 2.1 |
| 法 | 4 | 12.5 | 0.8 | 教育 | 2 | 5.7 | 1.8 |
| 現実 | 3 | 9.4 | 2.6 | 哲学 | 2 | 5.7 | 1.7 |
| 日本 | 3 | 9.4 | 1.8 | 考察 | 2 | 5.7 | 1.6 |
| 国際 | 3 | 9.4 | 1.8 | | | | |
| ヘーゲル | 3 | 9.4 | 1.7 | | | | |
| 哲学 | 3 | 9.4 | 1.6 | | | | |
| 家族 | 3 | 9.4 | 1.6 | | | | |
| 発展 | 3 | 9.4 | 1.6 | | | | |
| 人間 | 3 | 9.4 | 1.5 | | | | |
| 現実 | 3 | 9.4 | 1.2 | | | | |
| 研究 | 3 | 9.4 | 1.2 | | | | |
| 形成 | 3 | 9.4 | 0.8 | | | | |
| 概念 | 3 | 9.4 | 0.8 | | | | |
| 経済 | 3 | 9.4 | 1.2 | | | | |
| 思想 | 3 | 9.4 | 0.8 | | | | |
| 再建 | 3 | 9.4 | 0.8 | | | | |

| 1955-1964年 | | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|------|-----|------|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 | 特異性 |
| 自由 | 9 | 32.1 | 2.3 | ヘーゲル | 5 | 18.5 | 2.8 |
| 近代 | 9 | 32.1 | 1.7 | 国家 | 5 | 18.5 | 2.1 |
| 法 | 8 | 28.6 | 1.7 | 英国 | 4 | 14.8 | 4.6 |
| 労働 | 7 | 25.0 | 3.8 | 中心 | 4 | 14.8 | 3.6 |
| 経済 | 7 | 25.0 | 2.2 | マルクス | 4 | 14.8 | 2.7 |
| 歴史 | 6 | 21.4 | 1.0 | 法 | 4 | 14.8 | 1.8 |
| ヘーゲル | 5 | 17.9 | 3.4 | 問題 | 4 | 14.8 | 1.7 |
| 問題 | 5 | 17.9 | 1.1 | 食 | 3 | 11.1 | 7.9 |
| 国家 | 4 | 17.9 | 1.1 | 移行 | 2 | 7.4 | 15.0 |
| 概念 | 4 | 14.3 | 2.6 | 新聞 | 2 | 7.4 | 15.0 |
| スミス | 4 | 14.3 | 2.3 | 現象 | 2 | 7.4 | 11.4 |
| 構造 | 4 | 14.3 | 2.3 | インド | 2 | 7.4 | 9.1 |
| 教育 | 4 | 14.3 | 1.9 | 性格 | 2 | 7.4 | 6.4 |
| 人間 | 4 | 14.3 | 1.8 | 犯罪 | 2 | 7.4 | 5.8 |
| 哲学 | 4 | 14.3 | 1.8 | 時代 | 2 | 7.4 | 5.3 |
| ドイツ | 4 | 14.3 | 1.6 | 関係 | 2 | 7.4 | 3.5 |
| 成立 | 4 | 14.3 | 1.6 | 考察 | 2 | 7.4 | 2.1 |
| ヨーロッパ | 4 | 14.3 | 1.5 | 経済 | 2 | 7.4 | 1.5 |
| 資本 | 4 | 14.3 | 1.4 | 近代 | 2 | 7.4 | 1.1 |
| 世界 | 4 | 14.3 | 1.3 | 日本 | 2 | 7.4 | 1.0 |
| 思想 | 4 | 14.3 | 1.2 | | | | |
| 政治 | 4 | 14.3 | 1.2 | | | | |
| 現代 | 4 | 14.3 | 1.0 | | | | |

【図2】日本の市民社会言論における最頻出語句(1)

| 1960-1969年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| ヨーロッパ | 6 | 31.6 | 3.4 | マルクス | 9 | 16.7 |
| 自由 | 6 | 31.6 | 2.3 | 国家 | 9 | 16.7 |
| 法 | 6 | 31.6 | 1.9 | 公害問題 | 7 | 13.0 |
| 近代 | 6 | 31.6 | 1.6 | 近代 | 7 | 13.0 |
| 成立 | 5 | 26.3 | 2.9 | 展開 | 6 | 11.1 |
| 世界 | 5 | 26.3 | 2.4 | ヘーゲル | 5 | 9.3 |
| 経済 | 5 | 26.3 | 2.3 | 問題 | 5 | 9.3 |
| 英国 | 5 | 26.3 | 2.2 | 中心 | 4 | 7.4 |
| 歴史 | 5 | 26.3 | 1.2 | 日本 | 4 | 7.4 |
| 背景 | 4 | 21.1 | 5.0 | 関係 | 3 | 5.6 |
| 社会主義 | 4 | 21.1 | 4.7 | 成立 | 3 | 5.6 |
| 構造 | 4 | 21.1 | 3.3 | 英国 | 3 | 5.6 |
| 人間 | 4 | 21.1 | 2.7 | ドイツ | 3 | 5.6 |
| 思想 | 4 | 21.1 | 1.8 | 現代 | 3 | 5.6 |
| 政治 | 4 | 21.1 | 1.7 | 思想 | 3 | 5.6 |
| 日本 | 4 | 21.1 | 1.4 | 歴史 | 3 | 5.6 |
| 問題 | 4 | 21.1 | 1.3 | 法 | 3 | 5.6 |
| 展望 | 3 | 15.8 | 3.3 | 大衆社会 | 2 | 3.7 |
| ヘーゲル | 3 | 15.8 | 3.0 | 貨幣 | 2 | 3.7 |
| 社会学 | 3 | 15.8 | 2.7 | 宗教 | 2 | 3.7 |
| 社会的 | 3 | 15.8 | 2.7 | 環境 | 2 | 3.7 |
| 宗教 | 3 | 15.8 | 2.7 | 犯罪 | 2 | 3.7 |
| 展開 | 3 | 15.8 | 2.5 | 時代 | 2 | 3.7 |
| 科学 | 3 | 15.8 | 2.2 | 食 | 2 | 3.7 |
| 理論 | 3 | 15.8 | 2.2 | 資本 | 2 | 3.7 |
| 民主 | 3 | 15.8 | 2.1 | 都市 | 2 | 3.7 |
| 哲学 | 3 | 15.8 | 2.0 | 概念 | 2 | 3.7 |
| フランス | 3 | 15.8 | 1.9 | 経済 | 2 | 3.7 |
| ドイツ | 3 | 15.8 | 1.8 | | | |
| 現代 | 3 | 15.8 | 1.1 | | | |
| 国家 | 3 | 15.8 | 0.9 | | | |

| 1965-1974年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|-------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 成立 | 7 | 22.6 | 2.5 | 社会主義 | 45 | 21.7 |
| 日本 | 7 | 22.6 | 1.5 | 問題 | 36 | 17.4 |
| 英国 | 6 | 19.4 | 1.7 | マルクス | 24 | 11.6 |
| 歴史 | 6 | 19.4 | 0.9 | 国家 | 19 | 9.2 |
| マルクス | 5 | 16.1 | 2.2 | 現代 | 18 | 8.7 |
| 世界 | 5 | 16.1 | 1.5 | 思想 | 18 | 8.7 |
| 社会主義 | 4 | 12.9 | 2.9 | スミス | 18 | 8.7 |
| 批判 | 4 | 12.9 | 2.0 | 歴史 | 18 | 8.7 |
| 思想 | 4 | 12.9 | 1.1 | 人間 | 16 | 7.7 |
| 個人 | 3 | 9.7 | 4.1 | 経済 | 16 | 7.7 |
| なぜ | 3 | 9.7 | 3.8 | 近代 | 15 | 7.2 |
| 中心 | 3 | 9.7 | 2.0 | 共同体 | 13 | 6.3 |
| 系譜 | 3 | 9.7 | 1.7 | 共同性 | 10 | 4.8 |
| 発展 | 3 | 9.7 | 1.7 | 日本 | 10 | 4.8 |
| 社会学 | 3 | 9.7 | 1.7 | 展開 | 9 | 4.3 |
| 社会的 | 3 | 9.7 | 1.6 | ヘーゲル | 9 | 4.3 |
| スミス | 3 | 9.7 | 1.6 | 資本 | 8 | 3.9 |
| 展開 | 3 | 9.7 | 1.5 | 貨幣 | 7 | 3.4 |
| 科学 | 3 | 9.7 | 1.4 | 平田清明 | 7 | 3.4 |
| 民主 | 3 | 9.7 | 1.3 | 公害問題 | 7 | 3.4 |
| 人間 | 3 | 9.7 | 1.2 | ヨーロッパ | 7 | 3.4 |
| ヨーロッパ | 3 | 9.7 | 1.0 | 概念 | 7 | 3.4 |
| 現代 | 3 | 9.7 | 0.7 | 中心 | 7 | 3.4 |
| 問題 | 3 | 9.7 | 0.6 | 理論 | 6 | 2.9 |
| 近代 | 3 | 9.7 | 0.5 | 成立 | 6 | 2.9 |
| | | | | 哲学 | 6 | 2.9 |
| | | | | ロック | 5 | 2.4 |
| | | | | 教育 | 5 | 2.4 |
| | | | | ドイツ | 5 | 2.4 |
| | | | | 法 | 5 | 2.4 |

| 1970-1979年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|--------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 歴史 | 12 | 23.5 | 1.1 | 社会主義 | 58 | 20.9 |
| 現代 | 11 | 21.6 | 1.5 | 問題 | 35 | 12.6 |
| 英国 | 10 | 19.6 | 1.7 | 日本 | 31 | 11.2 |
| 近代 | 8 | 15.7 | 0.8 | マルクス | 29 | 10.4 |
| スミス | 7 | 13.7 | 2.2 | 現代 | 25 | 9.0 |
| 成立 | 6 | 11.8 | 1.3 | スミス | 23 | 8.3 |
| 思想 | 6 | 11.8 | 1.0 | 歴史 | 22 | 7.9 |
| 日本 | 6 | 11.8 | 0.8 | ヘーゲル | 21 | 7.6 |
| 法 | 6 | 11.8 | 0.7 | 国家 | 21 | 7.6 |
| 批判 | 5 | 9.8 | 1.5 | 経済 | 20 | 7.2 |
| マルクス | 5 | 9.8 | 1.3 | 共同体 | 19 | 6.8 |
| 問題 | 5 | 9.8 | 0.6 | 思想 | 19 | 6.8 |
| 研究 | 4 | 7.8 | 1.5 | 人間 | 18 | 6.5 |
| アメリカ | 4 | 7.8 | 1.4 | 中心 | 18 | 6.5 |
| 社会学 | 4 | 7.8 | 1.4 | ロックワード | 14 | 5.0 |
| 形成 | 4 | 7.8 | 1.2 | 概念 | 14 | 5.0 |
| 展開 | 4 | 7.8 | 1.2 | 近代 | 14 | 5.0 |
| 経済 | 4 | 7.8 | 0.7 | 哲学 | 13 | 4.7 |
| 方法 | 3 | 5.9 | 1.9 | 批判 | 13 | 4.7 |
| 論理 | 3 | 5.9 | 1.6 | 構造 | 12 | 4.3 |
| 危機 | 3 | 5.9 | 1.5 | 共同性 | 11 | 4.0 |
| 生活 | 3 | 5.9 | 1.2 | 形成 | 11 | 4.0 |
| 中心 | 3 | 5.9 | 1.2 | 資本 | 10 | 3.6 |
| 概念 | 3 | 5.9 | 1.1 | 理論 | 10 | 3.6 |
| 社会的 | 3 | 5.9 | 1.0 | ヨーロッパ | 9 | 3.2 |
| 文化 | 3 | 5.9 | 0.9 | 教育 | 9 | 3.2 |
| 理論 | 3 | 5.9 | 0.8 | ドイツ | 9 | 3.2 |
| 教育 | 3 | 5.9 | 0.8 | ロック | 8 | 2.9 |
| 哲学 | 3 | 5.9 | 0.7 | | | |
| 世界 | 3 | 5.9 | 0.5 | | | |

| 1975-1984年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|--------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 現代 | 11 | 25.0 | 1.7 | ヘーゲル | 26 | 13.8 |
| 歴史 | 9 | 20.5 | 1.0 | 日本 | 26 | 13.8 |
| 英国 | 8 | 18.2 | 1.6 | 中心 | 21 | 11.1 |
| 近代 | 8 | 18.2 | 0.9 | マルクス | 18 | 9.5 |
| 思想 | 7 | 15.9 | 1.3 | 近代 | 18 | 9.5 |
| 法 | 7 | 15.9 | 1.0 | 国家 | 18 | 9.5 |
| スミス | 6 | 13.6 | 2.2 | ロックワード | 14 | 7.4 |
| 社会学 | 5 | 11.4 | 2.0 | ドイツ | 14 | 7.4 |
| 形成 | 5 | 11.4 | 1.8 | 現代 | 14 | 7.4 |
| 経済 | 5 | 11.4 | 1.0 | 社会主義 | 14 | 7.4 |
| マルクス | 4 | 9.1 | 1.2 | 批判 | 13 | 6.9 |
| 成立 | 4 | 9.1 | 1.0 | 経済 | 13 | 6.9 |
| 国家 | 4 | 9.1 | 0.5 | 歴史 | 13 | 6.9 |
| 生活 | 3 | 6.8 | 1.4 | 哲学 | 12 | 5.8 |
| 中心 | 3 | 6.8 | 1.4 | 理論 | 11 | 5.3 |
| 研究 | 3 | 6.8 | 1.3 | 形成 | 10 | 5.3 |
| アメリカ | 3 | 6.8 | 1.3 | 構造 | 10 | 5.3 |
| 批判 | 3 | 6.8 | 1.1 | 概念 | 10 | 5.3 |
| 文化 | 3 | 6.8 | 1.0 | 思想 | 10 | 5.3 |
| 理論 | 3 | 6.8 | 0.9 | 法 | 10 | 5.3 |
| 哲学 | 3 | 6.8 | 0.9 | 政治 | 8 | 4.2 |
| 政治 | 3 | 6.8 | 0.6 | スミス | 8 | 4.2 |
| 日本 | 3 | 6.8 | 0.4 | 政党 | 7 | 3.7 |
| 理論 | 2 | 4.5 | 3.7 | ロック | 7 | 3.7 |
| 方法 | 2 | 4.5 | 1.5 | 共同体 | 7 | 3.7 |
| 現実 | 2 | 4.5 | 1.3 | 人間 | 7 | 3.7 |
| 論理 | 2 | 4.5 | 1.2 | 新しい | 7 | 3.7 |
| 危機 | 2 | 4.5 | 1.2 | 家族 | 6 | 3.2 |
| 考察 | 2 | 4.5 | 0.9 | 資本 | 6 | 3.2 |
| 概念 | 2 | 4.5 | 0.8 | 成立 | 6 | 3.2 |
| 展開 | 2 | 4.5 | 0.7 | 自由 | 6 | 3.2 |
| 教育 | 2 | 4.5 | 0.6 | 教育 | 6 | 3.2 |
| フランス | 2 | 4.5 | 0.6 | | | |
| ドイツ | 2 | 4.5 | 0.5 | | | |

【図2】日本の市民社会言論における最頻出語句(2)

| 1980-1989年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 国家 | 9 | 19.6 | 1.2 | 近代 | 21 | 13.2 |
| 近代 | 7 | 15.2 | 0.8 | 国家 | 21 | 13.2 |
| 経済 | 6 | 13.0 | 1.1 | ヘーゲル | 17 | 10.7 |
| 思想 | 6 | 13.0 | 1.1 | 歴史 | 15 | 9.4 |
| 政治 | 6 | 13.0 | 1.1 | ドイツ | 14 | 8.8 |
| 現代 | 6 | 13.0 | 0.9 | 思想 | 12 | 7.5 |
| 現在 | 5 | 10.9 | 1.8 | 政治 | 11 | 6.9 |
| 批判 | 5 | 10.9 | 1.7 | マルクス | 11 | 6.9 |
| 労働 | 5 | 10.9 | 1.6 | 自由 | 9 | 5.7 |
| マルクス | 5 | 10.9 | 1.5 | 考察 | 9 | 5.7 |
| 問題 | 5 | 10.9 | 0.7 | 法 | 9 | 5.7 |
| 社会学 | 4 | 8.7 | 1.5 | 成立 | 8 | 5.0 |
| 形成 | 4 | 8.7 | 1.4 | 人間 | 8 | 5.0 |
| 新しい | 4 | 8.7 | 1.2 | 中心 | 8 | 5.0 |
| 哲学 | 4 | 8.7 | 1.1 | 経済 | 8 | 5.0 |
| ドイツ | 4 | 8.7 | 1.0 | グラムシ | 7 | 4.4 |
| 資本 | 4 | 8.7 | 0.9 | 理論 | 7 | 4.4 |
| 英国 | 4 | 8.7 | 0.7 | 現在 | 7 | 4.4 |
| 日本 | 4 | 8.7 | 0.6 | 戦後 | 7 | 4.4 |
| 法 | 4 | 8.7 | 0.5 | 社会主義 | 7 | 4.4 |
| | | | | 都市 | 6 | 3.8 |
| | | | | 現代 | 6 | 3.8 |
| | | | | 問題 | 6 | 3.8 |
| | | | | 概念 | 5 | 3.1 |
| | | | | 哲学 | 5 | 3.1 |
| | | | | 家族 | 4 | 2.5 |
| | | | | 国民 | 4 | 2.5 |
| | | | | 宗教 | 4 | 2.5 |
| | | | | フランス | 4 | 2.5 |
| | | | | 研究 | 4 | 2.5 |
| | | | | ロック | 4 | 2.5 |
| | | | | 公共 | 4 | 2.5 |

| 1985-1994年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|-------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 問題 | 14 | 21.5 | 1.4 | 国家 | 19 | 10.4 |
| 法 | 13 | 20.0 | 1.2 | 近代 | 16 | 8.8 |
| 国家 | 13 | 20.0 | 1.2 | 歴史 | 14 | 7.7 |
| 近代 | 13 | 20.0 | 1.0 | 成立 | 13 | 7.1 |
| 経済 | 12 | 18.5 | 1.6 | 現在 | 13 | 7.1 |
| 自由 | 11 | 16.9 | 1.2 | ドイツ | 13 | 7.1 |
| 現在 | 10 | 15.4 | 2.5 | ヘーゲル | 12 | 6.6 |
| マルクス | 10 | 15.4 | 2.1 | 企業 | 11 | 6.0 |
| 現代 | 10 | 15.4 | 1.0 | 思想 | 10 | 5.5 |
| 労働 | 9 | 13.8 | 2.1 | 日本 | 10 | 5.5 |
| 政治 | 9 | 13.8 | 1.1 | 政治 | 9 | 4.9 |
| 批判 | 8 | 12.3 | 1.9 | 社会主義 | 9 | 4.9 |
| 思想 | 8 | 12.3 | 1.0 | 法 | 9 | 4.9 |
| 自治 | 7 | 10.8 | 3.7 | 文化 | 8 | 4.4 |
| 課題 | 7 | 10.8 | 1.4 | 可能性 | 8 | 4.4 |
| 英国 | 7 | 10.8 | 0.9 | 都市 | 8 | 4.4 |
| 日本 | 7 | 10.8 | 0.7 | 問題 | 8 | 4.4 |
| 運動 | 6 | 9.2 | 2.2 | グラムシ | 7 | 3.8 |
| 戦後 | 6 | 9.2 | 2.0 | ヨーロッパ | 7 | 3.8 |
| 哲学 | 6 | 9.2 | 1.2 | 世界 | 7 | 3.8 |
| ドイツ | 6 | 9.2 | 1.0 | グローバル | 7 | 3.8 |
| ヨーロッパ | 6 | 9.2 | 1.0 | 考察 | 7 | 3.8 |
| 資本 | 6 | 9.2 | 0.9 | 国連 | 6 | 3.3 |
| 歴史 | 6 | 9.2 | 0.4 | 社会的 | 6 | 3.3 |
| | | | | 自由 | 6 | 3.3 |
| | | | | 人間 | 6 | 3.3 |
| | | | | 成熟 | 5 | 2.7 |
| | | | | フランス | 5 | 2.7 |
| | | | | アメリカ | 5 | 2.7 |
| | | | | 教育 | 5 | 2.7 |
| | | | | 概念 | 5 | 2.7 |
| | | | | 新しい | 5 | 2.7 |
| | | | | マルクス | 5 | 2.7 |

| 1990-1999年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|--------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 法 | 27 | 25.5 | 1.5 | 法 | 56 | 11.7 |
| 問題 | 25 | 23.6 | 1.5 | 日本 | 47 | 9.8 |
| 現在 | 20 | 17.9 | 2.9 | 国家 | 47 | 9.8 |
| 日本 | 19 | 17.0 | 1.1 | グローバル | 41 | 8.6 |
| 近代 | 17 | 16.0 | 0.8 | 企業 | 38 | 7.9 |
| 自由 | 16 | 15.1 | 1.1 | 現在 | 33 | 6.9 |
| 国家 | 16 | 15.1 | 0.9 | ポランディア | 30 | 6.3 |
| 歴史 | 16 | 15.1 | 0.7 | 課題 | 30 | 6.3 |
| 新しい | 15 | 14.2 | 2.0 | 問題 | 29 | 6.1 |
| 世界 | 14 | 13.2 | 1.2 | 構造 | 28 | 5.8 |
| 経済 | 14 | 13.2 | 1.1 | ネットワーク | 27 | 5.6 |
| 現代 | 14 | 13.2 | 0.9 | 現代 | 27 | 5.6 |
| 政治 | 13 | 12.3 | 1.0 | 生涯学習 | 26 | 5.4 |
| 思想 | 12 | 11.3 | 0.9 | 新しい | 26 | 5.4 |
| 21世紀 | 11 | 10.4 | 3.4 | 近代 | 22 | 4.6 |
| 理論 | 11 | 10.4 | 1.4 | 非営利 | 20 | 4.2 |
| 民主 | 11 | 10.4 | 1.4 | ヘーゲル | 18 | 3.8 |
| 課題 | 11 | 10.4 | 1.4 | 犯罪 | 17 | 3.5 |
| 企業 | 10 | 9.4 | 1.9 | 概念 | 17 | 3.5 |
| 文化 | 9 | 8.5 | 1.3 | オウム | 16 | 3.3 |
| マルクス | 9 | 8.5 | 1.1 | 銀行 | 15 | 3.1 |
| 非営利 | 8 | 7.5 | 3.0 | 悪 | 15 | 3.1 |
| 時代 | 8 | 7.5 | 2.2 | 検証 | 15 | 3.1 |
| 研究 | 8 | 7.5 | 1.4 | 安全 | 15 | 3.1 |
| 社会学 | 8 | 7.5 | 1.3 | 文化 | 15 | 3.1 |
| 社会的 | 8 | 7.5 | 1.3 | 政策 | 15 | 3.1 |
| 形成 | 8 | 7.5 | 1.2 | 可能性 | 15 | 3.1 |
| ヨーロッパ | 8 | 7.5 | 0.8 | 自由 | 15 | 3.1 |
| | | | | 教育 | 15 | 3.1 |
| | | | | ドイツ | 15 | 3.1 |

| 1995-2004年 | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|--------|-----|------|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 |
| 日本 | 72 | 25.0 | 1.6 | グローバル | 114 | 10.4 |
| 歴史 | 50 | 18.1 | 0.8 | 国家 | 114 | 10.4 |
| グローバル | 48 | 17.4 | 3.3 | 新しい | 109 | 10.0 |
| 新しい | 46 | 16.7 | 2.3 | 日本 | 103 | 9.4 |
| 問題 | 46 | 16.7 | 1.1 | 法 | 89 | 8.2 |
| 法 | 46 | 16.7 | 1.0 | 非営利 | 85 | 7.8 |
| 国家 | 43 | 15.6 | 0.9 | 課題 | 69 | 6.3 |
| 政治 | 40 | 14.5 | 1.2 | 国際 | 62 | 5.7 |
| 現代 | 39 | 14.1 | 1.0 | 求める | 59 | 5.4 |
| 課題 | 38 | 13.8 | 1.8 | 現代 | 59 | 5.4 |
| 現在 | 37 | 13.4 | 2.2 | 21世紀 | 56 | 5.1 |
| 民主 | 37 | 13.4 | 1.8 | 問題 | 53 | 4.9 |
| 世界 | 35 | 12.7 | 1.2 | 役割 | 52 | 4.8 |
| 21世紀 | 34 | 12.3 | 4.0 | 可能性 | 51 | 4.7 |
| 時代 | 32 | 11.6 | 3.4 | 現在 | 50 | 4.6 |
| 近代 | 31 | 11.2 | 0.6 | NGO | 48 | 4.4 |
| 地域 | 30 | 10.9 | 2.5 | 企業 | 45 | 4.1 |
| 国際 | 27 | 9.4 | 1.6 | ポランディア | 44 | 4.0 |
| 経済 | 27 | 9.4 | 0.8 | 公共 | 43 | 3.9 |
| 思想 | 27 | 9.4 | 0.8 | ネットワーク | 42 | 3.8 |
| 向ける | 26 | 8.7 | 3.5 | 向ける | 41 | 3.8 |
| 非営利 | 24 | 8.7 | 3.5 | 近代 | 41 | 3.8 |
| 展開 | 24 | 8.7 | 1.4 | 教育 | 38 | 3.5 |
| アジア | 23 | 8.3 | 2.1 | 歴史 | 38 | 3.5 |
| 文化 | 23 | 8.3 | 1.2 | 政治 | 37 | 3.4 |
| 理論 | 23 | 8.3 | 1.1 | 安全保障 | 35 | 3.2 |
| 可能性 | 22 | 8.0 | 3.5 | 民主 | 35 | 3.2 |
| つくる | 22 | 8.0 | 3.5 | 構造 | 34 | 3.1 |
| | | | | 概念 | 34 | 3.1 |

【図2】日本の市民社会言論における最頻出語句(3)

| 2000-2009年 | | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|-------|-----|------|-----|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 | 特異性 |
| 日本 | 116 | 27.4 | 1.8 | 日本 | 148 | 10.8 | 1.5 |
| グローバル | 82 | 20.6 | 3.9 | 新しい | 146 | 10.5 | 3.2 |
| 歴史 | 67 | 16.8 | 0.8 | 国家 | 144 | 10.4 | 1.2 |
| 国家 | 65 | 16.6 | 1.0 | グローバル | 122 | 8.8 | 2.8 |
| 課題 | 60 | 15.1 | 2.0 | 非営利 | 104 | 7.5 | 3.7 |
| 政治 | 58 | 14.8 | 1.2 | 法 | 89 | 6.4 | 0.8 |
| 新しい | 58 | 14.6 | 2.0 | 21世紀 | 85 | 6.1 | 5.3 |
| 現代 | 54 | 13.8 | 0.9 | 国際 | 79 | 5.7 | 3.0 |
| 民主 | 53 | 13.3 | 1.8 | 公共 | 76 | 5.5 | 3.8 |
| 地域 | 51 | 12.8 | 3.0 | 役割 | 73 | 5.3 | 2.9 |
| 問題 | 51 | 12.8 | 0.8 | 現代 | 68 | 4.9 | 1.2 |
| 世界 | 47 | 11.8 | 1.1 | 課題 | 66 | 4.8 | 2.0 |
| 法 | 47 | 11.8 | 0.7 | アジア | 65 | 4.7 | 2.6 |
| 国際 | 46 | 11.6 | 2.0 | 民主 | 64 | 4.6 | 3.1 |
| 現在 | 45 | 11.3 | 1.8 | 政治 | 64 | 4.6 | 1.3 |
| 文化 | 42 | 10.1 | 1.5 | 求める | 61 | 4.4 | 3.9 |
| 21世紀 | 40 | 9.5 | 3.1 | NGO | 59 | 4.3 | 3.6 |
| 向ける | 38 | 9.3 | 3.7 | 世界 | 57 | 4.1 | 2.2 |
| 役割 | 38 | 9.3 | 3.1 | 可能性 | 56 | 4.0 | 2.7 |
| アジア | 38 | 9.3 | 2.3 | 向ける | 55 | 4.0 | 3.2 |
| 時代 | 36 | 9.0 | 2.7 | 考える | 54 | 3.9 | 3.2 |
| つくる | 35 | 8.8 | 3.8 | 教育 | 53 | 3.8 | 1.2 |
| ヨーロッパ | 34 | 8.5 | 0.9 | ガバナンス | 52 | 3.7 | 4.3 |
| 経済 | 34 | 8.5 | 0.7 | 地域 | 50 | 3.6 | 2.4 |
| ガバナンス | 33 | 8.3 | 4.2 | 目指す | 46 | 3.3 | 3.7 |
| NGO | 33 | 8.3 | 3.8 | 考察 | 46 | 3.3 | 0.9 |
| 可能性 | 33 | 8.3 | 3.7 | 公共性 | 45 | 3.2 | 4.2 |
| 運動 | 33 | 8.3 | 1.9 | 歴史 | 45 | 3.2 | 0.5 |
| アメリカ | 33 | 8.3 | 1.5 | 問題 | 45 | 3.2 | 0.4 |
| 展開 | 33 | 8.3 | 1.3 | つくる | 44 | 3.2 | 3.4 |
| | | | | 企業 | 44 | 3.2 | 1.6 |

| 2005-2014年 | | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|-------|-----|-----|-----|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 | 特異性 |
| 日本 | 136 | 28.8 | 1.8 | 日本 | 174 | ## | 1.9 |
| グローバル | 82 | 17.9 | 3.4 | 法 | 105 | 8.5 | 1.0 |
| 政治 | 78 | 17.0 | 1.4 | 国家 | 103 | 8.3 | 0.9 |
| 歴史 | 78 | 17.0 | 0.8 | アジア | 96 | 7.8 | 4.4 |
| 現代 | 72 | 15.7 | 1.1 | 新しい | 85 | | |
| 国家 | 71 | 15.5 | 0.9 | 役割 | 80 | 6.5 | 3.5 |
| 課題 | 66 | 14.4 | 1.9 | グローバル | 74 | 6.0 | 1.9 |
| 新しい | 64 | 13.9 | 1.9 | 政治 | 73 | 5.9 | 1.7 |
| 問題 | 60 | 13.1 | 0.8 | 国際 | 61 | 4.9 | 2.6 |
| 国際 | 58 | 12.6 | 2.2 | 非営利 | 60 | 4.9 | 2.4 |
| 現在 | 57 | 12.4 | 2.0 | 教育 | 60 | 4.9 | 1.6 |
| 地域 | 56 | 12.2 | 2.8 | 地域 | 59 | 4.8 | 3.2 |
| 民主 | 55 | 12.0 | 1.6 | 課題 | 58 | 4.7 | 2.0 |
| 世界 | 54 | 11.8 | 1.1 | 現代 | 55 | 4.5 | 1.1 |
| 法 | 53 | 11.5 | 0.7 | 考える | 53 | 4.3 | 3.5 |
| 文化 | 51 | 10.9 | 1.6 | 民主 | 53 | 4.3 | 2.9 |
| 運動 | 50 | 10.0 | 2.3 | 世界 | 53 | 4.3 | 2.3 |
| アジア | 46 | 9.8 | 2.5 | 公共 | 51 | 4.1 | 2.9 |
| つくる | 44 | 9.6 | 4.2 | カ/ナンス | 50 | 4.0 | 4.7 |
| 政策 | 43 | 9.4 | 1.9 | 社会組織 | 45 | 3.6 | 5.5 |
| カ/ナンス | 39 | 8.5 | 4.3 | 企業 | 44 | 3.6 | 1.8 |
| 企業 | 39 | 8.5 | 1.7 | 韓国・朝鮮 | 43 | 3.5 | 3.3 |
| 自由 | 39 | 8.5 | 0.6 | 市場 | 42 | 3.4 | 6.7 |
| NGO | 38 | 8.3 | 3.8 | 21世紀 | 42 | 3.4 | 2.9 |
| 関係 | 38 | 8.3 | 1.6 | NGO | 42 | 3.4 | 2.9 |
| ヨーロッパ | 38 | 8.3 | 0.9 | ドイツ | 42 | 3.4 | 0.9 |
| 思想 | 38 | 8.3 | 0.7 | 東アジア | 41 | 3.3 | 5.2 |
| 教育 | 36 | 7.8 | 1.0 | 中国 | 40 | 3.2 | 2.6 |
| 韓国・朝鮮 | 35 | 7.6 | 4.0 | 現在 | 40 | 3.2 | 1.3 |
| 向ける | 34 | 7.4 | 3.0 | 歴史 | 39 | 3.2 | 0.5 |

| 2010-2018年 | | | | | | | |
|------------|-----|------|-----|-------|-----|------|-----|
| 図 書 | 出現数 | 出現率 | 特異性 | 逐 刊 | 出現数 | 出現率 | 特異性 |
| 日本 | 89 | 26.9 | 1.7 | 日本 | 126 | 14.4 | 2.0 |
| 政治 | 64 | 19.8 | 1.6 | 法 | 85 | 9.7 | 1.2 |
| 歴史 | 61 | 18.9 | 0.9 | アジア | 71 | 8.1 | 4.5 |
| 現代 | 51 | 15.8 | 1.1 | 役割 | 68 | 7.8 | 4.2 |
| グローバル | 50 | 15.5 | 3.0 | グローバル | 62 | 7.1 | 2.3 |
| 国家 | 50 | 15.5 | 0.9 | 消費 | 59 | 6.7 | 3.9 |
| 問題 | 49 | 15.2 | 1.0 | 国際 | 54 | 6.2 | 3.2 |
| 新しい | 45 | 13.9 | 1.9 | 政治 | 54 | 6.2 | 1.7 |
| 自由 | 43 | 13.3 | 1.0 | 地域 | 52 | 5.9 | 3.9 |
| 法 | 41 | 12.7 | 0.8 | 教育 | 52 | 5.9 | 1.9 |
| 課題 | 40 | 12.1 | 1.6 | 国家 | 51 | 5.8 | 0.7 |
| 民主 | 39 | 11.8 | 1.6 | 課題 | 45 | 5.1 | 2.2 |
| 地域 | 38 | 11.5 | 2.6 | 民主 | 43 | 4.9 | 3.3 |
| 関係 | 37 | 11.1 | 2.2 | 韓国・朝鮮 | 41 | 4.7 | 4.4 |
| 国際 | 37 | 11.1 | 1.9 | 新しい | 41 | 4.7 | 1.4 |
| 現在 | 36 | 10.8 | 1.8 | 歴史 | 39 | 4.5 | 0.7 |
| 政策 | 35 | 10.5 | 2.2 | 社会組織 | 37 | 4.2 | 6.4 |
| アジア | 34 | 10.2 | 2.6 | 向ける | 37 | 4.2 | 3.4 |
| 運動 | 32 | 9.9 | 2.3 | 可能性 | 36 | 4.1 | 2.7 |
| 文化 | 32 | 9.9 | 1.5 | 企業 | 35 | 4.0 | 2.0 |
| 思想 | 30 | 9.3 | 0.8 | 近代 | 34 | 3.9 | 0.6 |
| アメリカ | 29 | 9.0 | 1.7 | 東アジア | 33 | 3.8 | 5.9 |
| ヨーロッパ | 29 | 9.0 | 1.0 | 中国 | 33 | 3.8 | 3.1 |
| 世界 | 29 | 9.0 | 0.8 | 現在 | 33 | 3.8 | 1.5 |
| 中国 | 28 | 8.7 | 3.8 | 取り組み | 32 | 3.7 | 8.3 |
| 教育 | 28 | 8.7 | 1.1 | 震災 | 32 | 3.7 | 5.8 |
| つくる | 26 | 8.0 | 3.5 | 平和 | 32 | 3.7 | 3.8 |
| 近代 | 26 | 8.0 | 0.4 | 非営利 | 32 | 3.7 | 1.8 |
| 時代 | 24 | 7.4 | 2.2 | 問題 | 32 | 3.7 | 0.4 |
| | | | | 形成 | 31 | 3.5 | 1.8 |

【図2】日本の市民社会言論における最頻出語句(4)

「近代」「歴史」「現代」「時代」など、《歴史》を主題とする言及群に着目するのもよい、或いは「国家」「法」「政治」「経済」「教育」など社会生活における基本的な諸《制度》への言及に見るのもよい。このように、分析者が、分析対象の有するポテンシャルから特定の意図に基づき部分や側面を選択したり要約したりしていることが明確になるのは、テキストマイニングの欠点ではなく利点である。⁴⁾

特定の期間に特異に頻出する語句群を概観すると以下のようなものである。

1930年代から50年代前半までのあいだには「精神」と「階級」が特異に頻出する時期があった。1960年に前後する数年間には「インド」「食」「移行」「新聞」「現象」が頻出した。1960年代には「公害」「大衆社会」「貨幣」「個人」「なぜ」「展開」が頻出した。1970年代には「提言」「ごみ処理」「ロッキード」が頻出した。1980年代には「自治」が頻出した。1990年代には「目指す」「オウム」「銀行」「21世紀」「向ける」「非営利」「可能性」「つくる」が頻出した。2000年代には「グローバル」「向ける」「つくる」「ガヴァナンス」「NGO」「可能性」「韓国」が頻出した。2010年代には「つくる」「取り組み」「中国」が頻出した。これらについては第4節で吟味する。

3 《欧米思想》の内容

ここでは、市民社会言論の主要な一主題である《欧米思想》を検討する。

3. 1 《欧米思想》の概観

《欧米思想》は図書372件（全989件に対して約37.6%）、逐刊の785件（全3,284件に対して約23.9%）を占める。【図3】は各期間における《欧米思想》の件数を、市民社会言論全体の件数と比較している。カッコ内が《欧米思想》を含む題目の件数である。市民社会言論全体の件数が増えてゆくのにしたがって、《欧米思想》はシェアこそ下がってゆくものの、件数自体はむしろ増

4) 誤解がないよう申し添えるが、巨匠の著作とその諸解釈を読み込む伝統的な手法で〈思想史〉を論じる場合ならば、このような分析者側の選択の問題が起こらないと思うのは錯覚である。伝統的な手法はこの問題を単に顕在化させないだけである。むしろ「思想史」は石田雄・姜尚中（1997）の指摘するような事例の無尽蔵な宝庫である。

えていると分かる。

【図4】は、『欧米思想』のなかで頻繁に出現した人名の出現数を、全期間合計および期間別で示した（件数は図書と逐刊の合計である。全期間合計で3件未満の人名は割愛した）。「マルクス」「ヘーゲル」「スミス」「グラムシ」「ロック」が多くの期間に出現し、合計でも頻出していることが眼を引く。

これら人名の出現率の増減を期間別にみるとあらまし次のようだ。「マルクス」は1970年代に頻出の頂点を記録し、それ以降、おおむねなだらかに減少し続けている。「ヘーゲル」は「マルクス」とおおむね同様のしかたで増減している。「スミス」は前二者よりも早く40年代から頻出しており、前二者同様に70年代に頻出の頂点を記録し、それ以降も前二者と同様の減少傾向にある。「ロック」は70年代から80年代にかけて頻出している。「グラムシ」は60年代に現われた。「グラムシ」はほとんどの期間において前四者より出現率が低

| | 1935-49 | 1950s | 1960s | 1970s |
|----|---------|--------|--------|----------|
| 図書 | 15(9) | 32(15) | 19(12) | 51(28) |
| 逐刊 | 8(7) | 42(26) | 54(24) | 278(117) |

| | 1980s | 1990s | 2000s | 2010-17 |
|----|---------|----------|-----------|----------|
| 図書 | 46(20) | 106(45) | 396(133) | 323(110) |
| 逐刊 | 159(88) | 479(104) | 1388(275) | 876(147) |

【図3】欧米思想の量的変遷

| | 合計 | 1935-49 | 1950s | 1960s | 1970s | 1980s | 1990s | 2000s | 2010-18 |
|--------|-----|---------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| マルクス | 126 | 1 | 3 | 11 | 34 | 16 | 19 | 28 | 14 |
| ヘーゲル | 124 | | 12 | 8 | 23 | 18 | 25 | 23 | 15 |
| スミス | 74 | 3 | 7 | 1 | 31 | 6 | 8 | 10 | 8 |
| グラムシ | 62 | | | 1 | 2 | 8 | 6 | 25 | 20 |
| ロック | 24 | | 1 | 3 | 9 | 5 | 2 | 3 | 1 |
| ヴェーバー | 14 | 1 | 1 | 4 | 2 | 1 | 2 | 3 | |
| ミル | 12 | | | 1 | 3 | 1 | 1 | 3 | 3 |
| ヒューム | 10 | 4 | | 1 | | 2 | 2 | | 1 |
| ルソー | 9 | | | | 2 | 4 | | 3 | |
| ハーバーマス | 9 | | | | | | 1 | 5 | 3 |
| カント | 8 | | 1 | 2 | | | 3 | 2 | |
| フーコー | 4 | 1 | | | 1 | 1 | | | 1 |
| シュタイン | 4 | | 3 | | 1 | | | | |
| ホッブズ | 4 | | | | 1 | 2 | | 1 | |
| フォイエール | 4 | | | | | 3 | | 1 | |
| コンドルセ | 4 | | | | | 4 | | | |

【図4】欧米人名の量的変遷

いとは言え、2010年代に限っては「マルクス」よりも頻出している。

「マルクス」「ヘーゲル」「スミス」「ロック」「グラムシ」の関係は、1990年代に先立ち蓄積されてきた日本の市民社会言論の社会思想的・社会哲学的な学術研究の主要部分そのものだ。したがって《欧米思想》を更に掘り下げるには、先行研究の知見を要約し、それをテキストマイニングにより裏付けてゆくのが得策である。

3. 2 特殊マルクス主義的市民社会

今日では周知のことだが、古代から近世に至るまで、ラテン語 *societas civilis* は専ら国制を指した (Riedel, Manfred 1975=1990) (Kocka, Jurgens 2002)。しかし20世紀日本の学術語としての市民社会はむしろ人々が形成する、国制とは異質な、時に国制に対抗できる集団の概念 (平子友長 1998) (植村邦彦 2010)、特に産業資本制下における新たな経済的・政治的・文化的勢力である有産・資本家階級を指してきた。しかも、20世紀日本の市民社会言論においては、これが、17世紀英国の社会思想に起源を有する、近代社会の普遍的かつ根本的な原理と解されてきた。

《欧米思想》における頻出人名第5位で、近代英国社会思想の1つの主要な出発点を提供したジョン・ロックが、政府を打倒する権利すら認めるほど、有産市民とそのエートスに重要性を認めていたのは事実だ。しかしロックのテキストを読んでみれば直ちに分かるように、彼は語用法においては伝統に忠実だった。『政府二論』第2論文第7章の題目 ‘Of Political or Civil Society’ (Locke [1689]1970:336) に明瞭に見られる通り、ロックにおいて *civil society* とは *political society* つまり人々の財産を保護する政府が存立している状態と同義である。

《欧米思想》における頻出人名第3位のアダム・スミスも、政治的支配によるのとは異質な、人々の経済活動の固有の秩序の概念を提起したが、テキストを確認すれば判明する通り、スミスは語用法においてはロック以上に保守的だった。『国富論』に ‘civil society’ という成句は1回だけ、何を指すか不明瞭

な仕方 で用いられるだけである (Smith [1776]1986:vol2.399) .⁵⁾

要するに、語用法を見る限り、20 世紀日本の学術語としての市民社会はラテン語 *societas civilis* と異なるだけでなく、17・18 世紀英国の社会思想における *civil society* ともかなり相違していると言うほかないのである。にもかかわらず、20 世紀日本の市民社会言論のなかでは長らくそう意識されにくかった。それは、両者が 19 世紀ドイツ思想により媒介されていたためだ。

民衆版 (Volksausgabe) からの初邦訳をうたい 1949 年に刊行された菅間正朔訳カール・マルクス『経済学批判』の序文には次の通りある。

私がやつた最初の仕事はヘーゲル法律哲学の批判的検討で、……国家形態と同様に法律的諸関係なるものは、……物質的な生活諸関係—その総体をヘーゲルは十八世紀のイギリス人……の前例に倣つて『市民社会 (*bürgerliche Gesellschaft*)』という名称の下に統括した—にあり、しかも市民社会の解剖学は経済学に求められなければならない、という結論に達した。

(マルクス [1859]1934=1949:5, 旧字を新字に修整。カッコ内引用者)

この引用でマルクスが述べる通り、G・W・F・ヘーゲルは『法哲学講義』において、私的利益を追求する有産市民がおりなす〈欲望の体系〉としての市民社会の概念を提起した。これは事実だ (ヘーゲル [1821]1974=2000:365-376)。しかしここでマルクスは、『法哲学講義』第3巻第2部「市民社会 (*Die bürgerliche Gesellschaft*)」が〈欲望の体系〉だけでなくポリツァイ (内政) とコルポラツィオン (自治権を有する諸団体) をも市民社会とし、言及していることには触れない。しかもマルクスは、ヘーゲルが英国人の用法を踏襲して市民社会という語句を用いたとの、疑義ある見解を示している。

日本の市民社会言論の出発点、すなわち、産業資本制下において経済的・政治的・文化的勢力となり、国制を左右するようになる新興階級としての市民社会の概念は、まずマルクスのこの特異な説を踏襲することから始めて、その枠

5) 『国富論』に 'civilized society' は 13 回出現する (Smith [1776]1986:vol.1, 17, 97, 314, 459; vol.2, 278, 297, 316, 317, 367, 367, 369, 373, 381) が、これらの 'civilized' は 'barbarous' と対比される、洗練された、理知的なものを指す。

内で遡及的にヘーゲル、スミス、ロックを解釈した結果として獲得されたものと考えられる。そうでなければ市民社会という語句が、ロックやスミスとの関連で言及されるはずがないのである。

その後、戦後日本の社会のあり方が固まってゆくにつれ、この伏線を隠す必要が薄れていったのだろう。日本の市民社会言論においては1950年代から「ヘーゲル」と「マルクス」が次第に出現を増やすようになった。それ以降1960年代末までにかけて、【図2】に見えるように、「ヘーゲル」と「マルクス」は日本の市民社会言論を席卷した。

この、特殊にマルクスの市民社会の概念は、現代から顧みれば理論的、概念史的に多くの問題を含んではいたのだが、それが戦後日本に与えた意義は過小評価すべきではない。

一方で、労働者革命を標榜する人々によれば、日本でも産業資本制の発展に伴って新たな中間層すなわち市民社会は自ずと生成する。ただしこの市民社会は資本制に寄生してインモラルに利益を貪ることに終始するはずで、国制に対抗するエートスなど期待すべくもない。この勢力の動向は、労働者革命を目指すうえで常にウォッチしておくべきである。これは特殊マルクスの市民社会をヘーゲル的な〈欲望の体系〉に寄せた実在的な解釈と言える。

戦後日本において産業化が進めば進むほど、賃労働者が地主や資本家を数的に圧倒するのは必至で、労働者革命は絵空事ではなかった。その可能性は【図2】における「社会主義」の動向に明瞭に見えるように、1960年代後半に最も高まった。

もう一方で、自由主義や社会民主主義を支持する、産業資本制の維持を求める人々によれば、産業資本制下で物質的な豊かさと安定を獲得する新中間層は、同時に高度な知識も摂取するようになり得る。それは国制の暴走を阻み、賃労働群衆を善導する市民社会になり得る。これは特殊マルクスの市民社会をロックとスミスに寄せた理念的な解釈と言える。このことも【図2】と【図4】における「スミス」および「ロック」の動向に看取できる。

3. 3 平田清明

【図2】の1960年代後半における「平田清明」「批判」「社会主義」「貨幣」

の出現には、互いに明確かつ密接な関係がある。これは、平田清明が1968年に雑誌『世界』267に掲載した「社会主義と市民社会」、1969年に刊行した図書『社会主義と市民社会』岩波書店、およびこれらに前後する一大言論ムーブメントが、戦後日本における特殊マルクスの市民社会に巨大な一石を投じたことをあらわしている。

この2件のテキストを中心に、このムーブメントを形成した著述群を目視で確かめてみると、平田らがマルクス理論における所有論、特にその一焦点をなす「貨幣」論の再読を通して、戦後日本における特殊マルクスの市民社会の、無意識裡のバイアスの一端を「批判」的に掴み、日本の「社会主義」に新たな見方を提起していたことが分かる。「市民社会を、資本家の社会という一義性において理解するのは、マルクス主義的隠語の世界においてである。…市民とは、自由平等な法主体であり、日常的＝経済的生活における、ひらの具体的人間である」（平田1968:51）。そして「近代市民社会において、…勤労する人間の個性・個体的労働・個体的所有が、いま社会主義社会において、はじめて開花する」（平田1968:59）。

平田が述べているのは次のことだ。戦後日本における特殊マルクスの市民社会すなわち産業資本制における有産階級の秩序空間は、それが実現する以前に、ロック、スミスの社会的諸関係のエートスが浸透した、先駆形態としての市民社会が自己実現してゆく過程の1コマとして捉えないと、マルクス理論のトータルな理解に困難を生じる。また、いくら産業資本制が発展しても、ロック、スミスのエートスが欠落した日本社会に市民社会は生成しえないし、マルクスが描いたような社会主義を実現するのは不可能である。あるいは不可能より以前に、そもそも実現する意味がない。

今日から振り返れば、平田のこの指摘は、戦後日本の特殊マルクスの市民社会の、ヘーゲルの解釈とロック、スミスの解釈を自覚的に関係づけた、手堅く小さな前進とも見えるが、当時、旧来の日本社会主義に対する、その絶望的とも言うべき否定的展望が与えた衝撃は大きかった。この平田の議論に呼応して、1970年、竹内芳郎は「われわれにとって「資本論」とは何か——平田清明「市民社会と社会主義」をめぐる」を3回にわたり雑誌『思想』（550, 551, 552, 1970）に掲載したのに続き、1970年には雑誌『現代の理論』7（11）

が特集「市民社会とマルクス主義」を組み、6件の記事を掲載した。さらに1971年には関東学院大学の紀要『経済系』86が「市民社会と社会主義」と題して巨大な特集を組み24件の記事を掲載し、1973年には再び雑誌『現代の理論』10(1)が、特集「共同体・市民社会・社会主義」を組み10件の記事を掲載している。

3. 4 グラムシ

【図2】【図4】に見えるように、1980年代以降「マルクス」「ヘーゲル」「スミス」「社会主義」は揃って出現を減らしてゆく。そのなかで出現率を向上させてゆくのが「グラムシ」である。2010年代、その出現率については「マルクス」を上回るに至っている。

黒沢惟昭(2004)によれば、アントニオ・グラムシの市民社会は、公権力の直接の統制を受けない、「支配＝被支配の諸集団の」「ヘゲモニーが対立し抗争する領域と側面」(黒沢2004:53)の概念であり、国制のような総合的権力構造は、こうした多種多様な市民社会におけるヘゲモニー諸関係の総体との関係において成り立っている。このグラムシ的市民社会は、例えば職場における管理職と工具、学校における教師と生徒、マスメディアにおける送り手と受け手、病院における医者と患者など、国制権力がしばしば直接には介入しない諸領域における非対称な人間諸関係の総体を意味する。

グラムシ的市民社会は、国制とは異質な人間関係の秩序という含意を、戦後日本における特殊マルクスの市民社会とのあいだに共有している。また特定の歴史的・文化的前提に拘束されない、きわめて自然誌的で社会科学的な概念であって、そこから展望される社会改良の構想が、国制構造の総体的で一挙的な転倒と必ずしも同一でない点で、平田の批判が正面からは妥当しない。グラムシ的市民社会は、近代日本の特殊マルクスの市民社会の概念と、1970年に前後する平田らのムーブメントを引き受けて、1980年代以降に可能な日本の市民社会言論のあり方を示したと言える。

3. 5 日本の市民社会の存在と不在

本章を閉じるにあたり、その知見を大畑(2015)と照合しておこう。

大畑（2015）によれば「1990年代後半以前の「日本の市民社会」に関する論議が、日本における市民社会の不在ないし脆弱性、奇形性を強調していたのに対し、1990年代後半以降の「日本の市民社会」に関する・・・論議の前提は「（現在の）日本にはともかくも市民社会と言えるものがある」ということになる」（大畑 2015:71）。これに本章の知見を加えれば次のことである。1930年代までは遡る日本の市民社会言論の始発点において、特殊マルクスの市民社会の概念は、一方で産業資本制下に必然的に生成する新たな中間層としての市民社会の日本における存在を、他方では国制の暴走を阻み、賃労働群衆を善導する市民社会の予定ないし期待された生成を指し示していた。日本における市民社会の不在を明確に理論的に提起したのは1970年に前後する批判的マルクス再読解のムーブメントだった。1980年代から、グラムシ的市民社会の概念は、日本（および国政的構造を有する全ての人間社会）における、全体と個を媒介する諸制度としての市民社会の存在を提起していた。

4 爆発的増大に先立つ各期間の特徴

ここでは、日本の市民社会言論が爆発的に増大する以前の各期間に特徴的に頻出する語句に注目して分析をおこなう。

4. 1 1950年代の「インド」と「食事」

1930年代から1950年代にかけては「精神」「階級」「移行」「新聞」「現象」「インド」「食事」が特異に頻出している。

「階級」6件はもちろん特殊マルクスの市民社会の不可欠の構成要素であり、それ以上の説明は要さないだろう。「新聞」2件はマルクスが若いころに編集長を務めたライン新聞への言及である。「移行」2件もこの記事における共起である。

「インド」の出現は1957年に中村元が雑誌『心』10（2）および10（3）に掲載した「インドにおける市民社会の問題」の2件である。この両論文において、中村は総じて「インドにおける市民社会の未発達」（中村 1957a:70-71）を論じている。中村によれば紀元前3世紀頃にひとつの身分呼称としてあらわれ

た gahapati は「商業資本家が漸次に独立の階級（当時のブルジョアジー！）として認められ」（中村 1957a:73）、なかには「工業生産に従事していた者もあつたが」（中村 1957a:73）、「積極的に王権に対して抗争するといふことがなかつた」（中村 1957a:74）。

この中村論考は典型的に特殊マルクスの市民社会の概念に依拠したものと解することができる。ここで中村がインドに存在したという市民社会は、そのヘーゲルの解釈であり、それが未発達だったという意味は、ロック的、スミスの社会的諸関係のエートスを持ちえなかったことにある。

「食事」の出現は 1959-60 年に児玉定子が昭和女子大学の紀要『学苑』235, 237, 239 に掲載した「イギリス市民社会（19 世紀前半）の食事様式」の 3 件である。この連載において市民社会とは、「典型としては、完全に市民本位の社会が成立した十九世紀三十期間のイギリス」（児玉 1959a:61）を指し、特に市民が「有頂天」（児玉 1959a:62）を謳歌し、「それまでは土地所有者であることが選挙権の資格になっていた、市民に不利な制限選挙が、年収五十ポンド以上あればよいということまでようやくに拡大され」た時点におけるそれを指す。この市民社会は「近代工業の展開」を「その基礎」（児玉 1959b:97）とし、「宮廷の文化をはじめは模倣し、継承し、消化しつつ、やがて市民独自の文化を創造してきた」（児玉 1959a:4）。その独自の文化の内容の一端は「子供と一緒にあそんでやるとか、家庭での団らん、笑い声というような、現代ではごくあたりまえの…スイート・ホーム」（児玉 1960:56）に看取できる。

児玉論考における市民社会は、明らかに特殊マルクスの市民社会のロック、スミスの解釈に依拠している。ただし単に諸階級の政治的、経済的諸関係を分析するのではなく、そこに確立された食文化を関心の焦点としている点は、後のグラムシ的展開を予告していると言える。

「現象」2 件はいずれも「市民社会における犯罪の現象法則」という成句での出現だが、筆者の能力ではそれ以上の分析ができなかった。「精神」は 1940 年代後半の、多くの著者の論文を集めた叢書における出現が大部分で、市民社会との直接の共起は大塚久雄『宗教改革と近代社会』の 3 訂版（1952）の第 4 章の題目「資本主義と市民社会——その社会的系譜と精神史的性格」のみである。

4. 2 1960年代後半の「大衆社会」

1960年代後半に特異に頻出する「大衆社会」2件は1966年の作田啓一「市民社会と大衆社会」『思想』(507)と1967年の蠟山政道「大衆社会から市民社会へ」『自由』(9.4)である。いずれも、20世紀半ば以降の産業資本制下の賃労働階級が、マルクス理論の想定を超えて経済的に豊かになり政治的権利を獲得し、マスメディアによって情緒的に結び合った状況を「大衆社会」と名付け、未来に実現すべき望ましい社会の在り方を改めて模索する論考である。

作田(1966)は、チャールズ・ライト・ミルズ、デヴィッド・リースマン、ウィリアム・コーンハウザーという、同時代の米国の社会科学者の大衆社会論を紹介し、それらにおける市民社会の位置付けについて考察している。ここで興味深いのは、これら3名の米国人が、作田の検討の俎上に乗った著書群のなかで *civil society* あるいは *bourgeois society* という語句を全く用いていないように思われることである。しかも作田はこの論考の冒頭付近で、自らの考察がマルクス理論には依拠していないことを明言している。つまりこの時期、マルクス主義者でなく、17・18世紀の英国思想を研究しているわけでもない社会学者が、市民社会という語句を用いていない米国の最新学説を紹介しつつ、そこに市民社会に関する知を見出すことができたのである。それほどまでに、特殊マルクスの市民社会およびその2大解釈は知識人全体に常識として浸透していたと考えられる。

蠟山(1967)は、支配層と大衆社会のあいだ、あるいは全体社会と個のあいだを媒介する、選挙とマスメディア以外の多様な諸制度を設けることによって、日本において健全なマスメクラシーが実現できると主張している。安保闘争や大学闘争におけるように大衆社会の政治的意思を特定の思惑から瞬間的にマニピュレートすることに終始するのは不毛であって、もっと持続的な組織・制度を有する「市民的自立自発組織」(蠟山1967:30)が数多く形成され、居住地域の共通利害に関する政治的意思を日常的に議論し取りまとめる働きをすべきである。かくして支配層と大衆社会は、市民社会によって適切に媒介されうる。

作田(1966)と蠟山(1967)は、大衆社会化した日本の当時の現実を特殊マルクスの市民社会と照合した。蠟山はそれに加えて、ロック、スミスの理念

的に解釈された特殊マルクスの市民社会を、国制と賃労働大衆を適切に媒介する自立自発的組織へとアップデートし、それを日本において育成、強化できるし、すべきだとする立場を打ち出している。その市民社会は、従来のように階級として一枚岩の抽象的な集団としては想定されておらず、より 20 世紀社会学のリアリズムに寄せて、中間媒介諸組織としてイメージされている。

1960 年代の図書に特徴的に頻出する「個人」(2 件)と「なぜ」(3 件)、逐刊に頻出する「展開」については、筆者の力量では有意義な知見を導くことができなかった。

4. 3 1960-70 年代の「公害」と「ごみ処理」

1960 年代から 1970 年代の逐刊では「公害」「大衆社会」「ごみ処理」「ロッキード」の頻出が特徴的である。同じ時期の図書に特徴的な頻出語句は「背景」「個人」「なぜ」「提言」である。

「公害」(7 件)の出現は 1969 年 6 月に雑誌『科学朝日』が組んだ特集の題目「公害問題と市民社会」、およびその特集記事群である。

この特集において、実際に文中に市民社会という語句が出現するのは磯村英一の論文「被害者意識から防衛権利意識へ 変る生活環境と "慣性の法則"」の結論部分における次の一文である。「公害問題こそは、これまで住民はあっても市民としての自覚がなかった都市という空間に、新しく市民をつくり、市民社会をつくるきっかけを与えるものである」(磯村 1969:43)。従来の公害は、足尾や神岡、水俣のように特定の地域内の局地的な被害と捉えられたが、この時期の日本の公害問題は、高度経済成長に伴い、巨大化した法人企業群の営利活動の副産物が日本各地の都市部を無差別かつ大規模に汚染するという新しい局面に入りつつあった。磯村の見通しによれば、全国の都市部の住民たちはマスメディアを介して醸成され形成される自らの生活防衛意識により、国制に向けて己の権利を主張し、対策を要求する(せざるをえない)はずだ。

ここで磯村が想定している市民社会は 3 点において興味深い。第 1 に、それは特殊マルクスの市民社会のヘーゲル的解釈におけるような産業資本制の単なる寄生者ではなく、その被害者としての側面をも有している。また第 2 に、ロック的解釈におけるような主体的な教養層というわけでもなく、むしろ群衆

心理学的マニピュレーションの客体としての性質を色濃く有している。第3に、蠟山（1967）が予告した中間媒介諸組織としての市民社会を、公害問題を焦点として、より具体的に、いまにも生成しそうなものとして描いている。

これらを要するに、磯村（1969）は、同じ時期の作田（1966）、蠟山（1967）とともに、特殊マルクスの市民社会を出発点とし、そのロック、スミスの理念主義の路線を言外に踏襲しつつ、20世紀社会学のリアリズムを摂取することでアップデートし、後のグラムシの市民社会に連なる知見をもたらしていたと言えるだろう。

「ごみ処理」は、この磯村論文の問題提起を引き受けて組まれたに違いない、雑誌『経済評論』1974年の特集「ごみ処理——市民社会成立の鍵」の特集題目および特集記事の4件である。

4. 4 1970年代の「ロッキード」

6件の「ロッキード」はすべて1976年の雑誌『現代の眼』17（11）による特集「日本的市民社会とロッキード狂騒曲」からの出現である。うち、実際に市民社会という語句が出現するのは、冒頭を飾る丸山邦男といいだももの対談「日本的市民社会の自壊」だけなのだが、当時の一評論家の思考における、平田以前と以後の市民社会概念の混在の一実例として興味深い。

この対談記事において、丸山は一方で「市民社会という言葉自体はよくわからないんだけど、日本に西欧的な意味での市民社会があったかどうか、これからも生まれる可能性があるかというふうなことも疑問がある」（丸山・いいだ 1976:108）として、平田以降の、日本における市民社会の本質的な不可能性の認識を示している。その一方では、特殊マルクスの市民社会の実在的解釈に依拠して、市民社会をおおむね「社会党や、共産党」を支持する「中小企業経営者レヴェルとサラリーマン・インテリ層」、「圧倒的多数の中間層」（丸山・いいだ 1976:111）ともしている。そのエートスは、丸山によれば、せいぜい「もうちょっと先進的で、合理的で、…効率のいい、…そういう資本主義にしましょう」（丸山・いいだ 1976:113）という程度である。

我々から見れば明らかに矛盾する平田以前と以後の2つの概念が同居できている理由は、この対談において丸山が訴えるのが、当時の日本における「ロッ

キード事件の…戦犯と売国と金権という、こういう三大悪を暴露」(丸山・いいだ 1976:113) する資格を有する主体が不在であること、あるいはそれが生成しようがないことへの「シラケ」(丸山・いいだ 1976:111) だからだ。そのような主体としてかつて想定されていたのは、ロック、スミスの的に解釈され、生成を待望された特殊マルクスの市民社会だが、そのような理念は言えは言うほど空々しい。なぜなら、戦後日本の自称市民たちは、自発的に協力し合える自由で平等な個人たちでは全くなく、私企業とは名ばかりの、〈株式会社日本〉の成長によって豊かさと安定を得ている、そもそもロッキード事件において罪に問われている側と同罪の人々なのだから。

このシラケは、単に市民社会の理念的展望が空々しいだけでなく、労働者革命の展望もすでに潰えており——もともと丸山はこの展望を重視していた(丸山・いいだ 1976:111)——、他に有力な展望も存在しないゆえ、非常に深刻だ。そこで予想されるのは、どんな理念的構想とも無縁な日本的〈欲望の体系〉の固着であろう。丸山の思考において、特殊マルクスの市民社会のヘーゲルの解釈と平田の市民社会は、このシラケた閉塞のなかで同居しているのである。

なお、5.1 から 5.3 にかけて述べるように、1990 年代の日本の市民社会言論の爆発的増大は、「非営利」組織の紹介・導入とともに始まっているのだが、それは恐らく「非営利」組織が、70 年代に丸山が目撃していた日本的〈欲望の体系〉とはかなり異なる性質を持っており、蠟山・磯村ヴィジョンにあったような中間媒介諸組織として現実に働く可能性、つまりシラケを免れる可能性があったためと思われる。

4. 5 1970 年代後半から 1980 年代前半の「提言」

この時期の図書 2 件における「提言」の特異な出現は、日本生産性本部産業教育委員会『これからの経営理念と産業人の価値観：提言と調査研究：企業市民社会の概念を中心に』(日本生産性本部 1979) と、みなと経済振興懇談会研究第三グループ『チャレンジ！ヨコハママーチャント：創造的市民社会への貢献をめざして 横浜の小売商業の振興に関する提言』(横浜市経済局 1984) による。いずれも公的な性格を有する団体が、望ましい経済活動の在り方を提言し

ようとする際に市民社会という語句を用いている。これは5.4と5.5で後述するように、1990年代以降「ガヴァナンス」という語句の頻出とともに本格化する企業改革、市場改革の動向の先駆と捉えることができる。

4. 6 1980年代後半から90年代前半の「自治」

この時期における「自治」の特異な頻出は図書における7件である。うち2件が日本の地方公共団体としての自治体、3件が理念ないし模範としての市民(的)自治として言及されており、残り2件は題目を読む限りでは残念ながら文脈が不明である。この時期は戦後3波(終戦直後、高度成長期、地方の時代)に渡った地方自治ムーブメントが終息しつつあり、その再構成、あるいは前3波から距離を置いた新たな地方自治のあり方が模索されたものと考えられる。

その再模索が一定の方向を示し、その後の市民社会言論の動向とのつながりが明瞭な一例としては、本間義人『まちづくりの思想：土木社会から市民社会へ』(有斐閣選書1994年)を挙げることができる。中央の強力な指導の下、高度経済成長のもたらした利益を地方に再分配するという政治経済体制がいよいよ本当に過去のものとなるなかで、各地域の固有の文化的資源を支柱として住民の参加を引き出しながら、相対的に自律的な社会経済圏の形成を目指す、という動向である。これは蠟山・磯村的な中間媒介諸組織としての市民社会のヴィジョンをポスト高度成長の現実のなかで具体化する一案として位置づけ可能と言える。

これ以来、2018年現在に至るまで、このような住民参加のまちづくり・地域おこしの試行は日本の随所で多々おこなわれている。そこにおいて住民の参加と言われるものが、実際には動員にはかならない場合があるのは事実である。また、外野の評論家が正しくも述べるように、このようなモデルに従った地域改造の取り組みに対して、中央からの補助金を受け取るための口実という以上の意義をほとんど認めない場合があるのも事実である。

5 爆発的増大とそれ以降

以上からすでに、1990年代後半における日本の市民社会言論の性質が、それ以前とのあいだにかなりの連続性を有することが、3つの角度から判明している。第1に、日本のマルクス理論継承における実在としての市民社会把握は、理念的読解による生成待望論とともに、1930年代からおこなわれていた。第2に、1980年代にグラムシの名とともにおこなわれた社会科学的でリアリスティックな市民社会把握は、1950年代の階級文化論、1960年代後半の非マルクス主義的な公害論および大衆社会論によって先取りされていた。第3に、市民社会の生成待望論も、ロック、スミスとの直接の関係を失いながらも、社会の変化を踏まえながらリベラルな言論伝統のなかで持続し、1980年代後半から90年代前半の自治論に至るまで存続している。

5. 1 1990年代以降の「目指す」「向ける」および「求める」「つくる」

1990年代の図書と逐刊記事において、「目指す」「向ける」（およびそれに類する仕方 で用いられていると目される「求める」「つくる」）のいずれかを含む題目は計45件存在する。これらのうち〈市民社会は目下存在せず、今後生成すべき・生成するだろう〉という意味を含むのは3件である。

〈すでに市民社会は存在するが、そのヴァリエーションが今後生成すべき・生成するだろう〉という意味を含むのは14件である。こうしたヴァリエーションの具体例としては「地球市民社会」「日本的市民社会」「自由な市民社会」「分権型市民社会」「新しい市民社会」「成熟した市民社会」「参加型市民社会」「分権型市民社会」などがある。

この傾向は2000年代以降にも継続している。2000年代の図書と逐刊記事において、「目指す」「向ける」「求める」「つくる」のいずれかを含む題目は計281件存在し、うち〈市民社会は目下存在せず、今後生成すべき・生成するだろう〉という意味を含むのは12件である。

〈すでに市民社会は存在するが、そのヴァリエーションが今後生成すべき・生成するだろう〉という意味を含むのは25件である。ヴァリエーションの内容は「平和で暮らしやすい市民社会」「コモンセンスの市民社会」「新しい市民

社会」「新しい分権・市民社会」「創造的市民社会」「農村市民社会」「消費者市民社会」「グローバルな市民社会」「成熟した市民社会」「アクティブな市民社会」「地域循環型市民社会」「協働の市民社会」「国境を超えた市民社会」「かながわの市民社会」「ゆたかな市民社会」「豊かな心と協働による成熟した市民社会」「21世紀☆市民社会」「持続可能な市民社会」などである。

2010年代の図書と逐刊記事において、「目指す」「向ける」「求める」「つくる」のいずれかを含む題目は計169件存在し、うち〈市民社会は目下存在せず、今後生成すべき・生成するだろう〉という意味を含むのは3件である。〈すでに市民社会は存在するが、そのヴァリエーションが今後生成すべき・生成するだろう〉という意味を含むのは44件である。ヴァリエーションの内容は2000年代と比べて大幅に絞り込まれる傾向にあり、「消費者市民社会」28件、「新しい市民社会」3件、「グローバル市民社会」2件である。ほかに「日本的市民社会」「多元的市民社会」「権威主義のための市民社会」などが1件ずつである。

1990年代以降、2010年代に至っても、スミス、ロック的な、理念的な特殊マルクスの市民社会そのもの、或いはその蠟山(1967)・磯村(1969)による更新は、言及を減らしながらも存続していることが分かる。その一方で、蠟山(1967)・磯村(1969)・本間(1994)的市民社会ヴィジョンの実現、およびグラムシ的市民社会としての、実在する中間媒介諸制度の、質的な変化や新しい役割への期待が2000年代をピークにとっても大きくなっており、2010年代にはそのヴァリエーションが消費者市民社会なるものへとやや絞り込まれる傾向にある。

5. 2 1990年代の「オウム」と「銀行」

1990年代に特異に頻出する「オウム」18件のうち、15件は1996年に『法学セミナー』(494)が組んだ特集「市民社会の安全と法を検証する」の特集題目およびその特集記事群である。蠟山(1967)・磯村(1969)・本間(1994)ヴィジョンの延長線上で捉えれば、安定成長、消費化、地方分権という新しい環境のなかで生じた新新宗教は、全体と個を媒介し直す、市民の自発的な組織の一翼を担うポテンシャルを有していたはずだ。それが大量破壊兵器を用いて

無差別殺戮をおこなったのである。この特集は事件に伴って顕在化した多岐に渡る法的課題を整理している。

「銀行」15件はすべて1997年、雑誌『エコノミスト』（75-31）が組んだ特集「頭取の犯罪——市民社会にとって銀行の『悪』とは何か」からの出現である。この特集自体は第一勧銀の歴代首脳たちが長年にわたり組織的におこなっていた暴力団・総会屋に対する巨額

の資金供与を主題としており、「市民社会にとって銀行の「悪」とは何か」という副題は、そのコインの裏面、つまり預金者の財産の搾取と毀損を示している。

ここで市民社会は、中間媒介諸団体ではない。特殊マルクス的な市民社会のロック、スミスの解釈の原型そのもののような、中産階級のきわめて抽象的な、ノッペリとした観念が、墓場からよみがえったように用いられている。しかしこの年から日本は拓銀、山一証券、長銀、日債銀の破綻とともに世界金融恐慌の崖っぷちに迷い込んでいったわけで、穿った見方をすれば、この一見時代錯誤的な語句選択は、国民全般の私有財産の保護という近代国家の究極の存在理由の揺らぎをリアルタイムで見事に捕捉していたとも言える。

5. 3 1990年代以降の「非営利」

1990年代に特異に頻出する「非営利」（28件）は、その後も、2000年代には133件、2010年代には51件が出現する。【図5】は、各時期における「非営利」と頻繁に共起した主要な語句の出現率を掲げた。この【図5】を次のように読み解くことができる。

1990年代初頭、非営利組織は「企業」との連想で全体社会と個を媒介する「新しい」社会制度として登場したが、その新しさは2010年代にはやや薄れぎ

| 1990s | | 2000s | | 2010s | |
|--------|------|-------|------|--------|------|
| 新しい | 28.6 | 新しい | 33.1 | 公共 | 19.6 |
| 企業 | 17.9 | 日本 | 23.3 | 役割 | 19.6 |
| ngo | 14.3 | 可能性 | 21.8 | 新しい | 19.6 |
| 展望 | 14.3 | 求める | 18.0 | ngo | 17.6 |
| 地域 | 10.7 | ngo | 17.3 | 日本 | 15.7 |
| ボランティア | 10.7 | 役割 | 17.3 | 参加 | 11.8 |
| 課題 | 10.7 | 21世紀 | 15.0 | ボランティア | 11.8 |
| 21世紀 | 10.7 | 課題 | 12.0 | 課題 | 11.8 |
| 現在 | 10.7 | 公共 | 10.5 | 地域 | 9.8 |
| 法 | 10.7 | ソーシャル | 8.3 | 運動 | 9.8 |
| アメリカ | 10.7 | 政府 | 8.3 | 現在 | 9.8 |
| グローバル | 7.1 | 目指す | 7.5 | 企業 | 9.8 |

【図5】「可能性」と共起した語句の変遷

みである。代わりに2000年代にはそれがもつ「可能性」を「求める」ことに関心が移り、2010年代に向けて、その「可能性」が「公共」の具体的な「役割」として見出されていった。

実際に題目を目視で確認してみると、1990年代における「非営利」と「企業」の共起は、企業と並び立ちつつ性質が異なる「新しい」タイプの団体として非営利組織が紹介されている。2000年代には非営利組織と公の機関、営利企業のあいだの「役割」の切り分けがさかんに議論され、2010年代には非営利組織が特定の「役割」を遂行すべくおこなった活動の評価をいかにおこなうかが議論されている。「公共」は大部分、この時期に設立された大学の部局名だったが、「公・公共・私」の三元論という言い方で、磯村・蠟山・本間的な市民社会ヴィジョンにおける媒介諸制度の現実的な位置を言い表していると思われる逐刊記事題目が1件存在する。

1990年代以降、「可能性」は、5-1で言及した「目指す」「向ける」とほぼ同じように〈市民社会は目下存在せず、今後生成すべき・生成するだろう〉という意味のまとまりと、〈すでに市民社会は存在するが、そのヴァリエーションが今後生成すべき・生成するだろう〉という意味のまとまりに分類でき、ほぼ同じような用いられ方をしている。ただし2010年代に入っても、役割のヴァリエーションの絞り込みは起こっていないようだ。「消費者市民社会」以外にも、例えば「地域ブランド」、「子ども虐待問題」、「恒久的な平和」、「環境・協同・文化」、「ソーシャルビジネス」、「アジア人権憲章」、「ニューレフト運動」、「市民宗教」などが盛んに論じられている。

5. 4 2000年代の「グローバル」「ガヴァナンス」「NGO」

「グローバル」「ガヴァナンス」「NGO」はいずれも2000年代に特異頻出を記録しているが、初出は1990年代初頭である。この3語句いずれかが出現する図書・逐刊題目を抽出すると、計558件（1990年代図書11件、逐刊54件、2000年代図書115件、逐刊211件、2010年代図書81件、逐刊86件）であり、1990年代以降の日本の市民社会言論に占める「グローバル」「ガヴァナンス」「NGO」のシェアは約15.8%である。同じ時期の《欧米に関する議論》のシェア23.1%に比べればまだ小さいのだが、それ以前には存在しなかったことを

考えればたいへん急激な増加と言える。

これら3語句のあいだには明らかな相関がある。「ガヴァナンス」は90年代初頭、東欧の自由化、冷戦の終結、ソヴィエト連邦の解体、国際貿易の急増とともに、国家ガヴァメント以外の支配諸関係を総称すべく生み出された語句だ。「グローバル」

は「ガヴァナンス」という語句で指示され得る支配諸関係の一領域である。「NGO」は国籍に依存しない、国家ガヴァメント以外の、しかし何らかのガヴァナンスに関心を有する諸組織である。蛸山（1967）・磯村（1969）とグラムシ的市民社会が交差する、中間媒介諸組織として実在する市民社会が活動する諸場面が、「グローバル」「ガヴァナンス」「NGO」として論じられていると考えられる。

【図6】は、そうした「ガヴァナンス」の主要な指示対象の、1990年代から2010年代までの変動を示した。国家の主権に収まらない「グローバル」な支配諸関係への言及が最大なのに対して、「都市」「地方」という国内の諸単位への言及、「市場」「企業」「NPO」という非政治的なものへの言及もある。「アジア」は「日本」に隣接する諸国に言及している。「国連」が「ガヴァナンス」との関連では2000年代にしか言及されないことがやや意外かもしれない。

| | 総数 | 95-99 | 00-04 | 05-09 | 10-14 | 15-18 |
|-------|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| グローバル | 38 | 1 | 8 | 19 | 8 | 2 |
| 国家 | 24 | 2 | 4 | 7 | 6 | 5 |
| 地域 | 24 | 0 | 4 | 14 | 3 | 3 |
| 日本 | 21 | 0 | 4 | 14 | 2 | 1 |
| 都市 | 21 | 0 | 2 | 16 | 1 | 2 |
| 地方 | 17 | 0 | 2 | 12 | 3 | 0 |
| 市場 | 16 | 0 | 1 | 11 | 3 | 1 |
| 企業 | 13 | 1 | 1 | 9 | 2 | 0 |
| NPO | 12 | 0 | 3 | 7 | 2 | 0 |
| アジア | 12 | 0 | 0 | 10 | 1 | 1 |
| 国連 | 10 | 0 | 5 | 5 | 0 | 0 |

【図6】「ガヴァナンス」の対象の変遷

5. 5 2000年代の「韓国・朝鮮」

「韓国・朝鮮」は2000年代に特異な頻出を記録しているが、その頻出は1990年代から始まっている。【図7】は90年以降「韓国・朝鮮」と頻繁に共起した語句のリストである。10年ごとにかなり共起の傾向に偏りがあることが分かる。90年代には「国家」「現代」「国際化」など、00年代には「政治」「研究」「変化」「団体」など、10年代には「東アジア」などが特異に共起している。

| 1990s | | | | 2000s | | | | 2010s | | | |
|-------|---|----|-----|-------|----|----|-----|-------|----|-----|-----|
| アジア | 3 | 38 | 1.9 | 政治 | 28 | 42 | 2.0 | 日本 | 35 | 56 | 1.7 |
| 日本 | 2 | 25 | 0.8 | 日本 | 27 | 40 | 1.2 | アジア | 21 | 34 | 1.7 |
| 東アジア | 2 | 25 | 1.9 | 研究 | 21 | 31 | 2.4 | 東アジア | 18 | 29 | 2.2 |
| 国家 | 2 | 25 | 2.5 | 民主化 | 19 | 28 | 1.9 | 運動 | 14 | 23 | 1.4 |
| 現代 | 2 | 25 | 2.7 | 運動 | 17 | 25 | 1.5 | 中国 | 12 | 19 | 1.7 |
| 国際化 | 2 | 25 | 2.8 | アジア | 15 | 22 | 1.2 | 政治的 | 11 | 18 | 0.9 |
| | | | | 国家 | 13 | 19 | 2.0 | 国際化 | 10 | 16 | 1.8 |
| | | | | 現代 | 11 | 16 | 1.8 | 民主化 | 9 | 15 | 1.0 |
| | | | | 課題 | 11 | 16 | 1.8 | 問題 | 9 | 15 | 1.6 |
| | | | | 世界 | 10 | 15 | 1.8 | 法 | 8 | 13 | 1.7 |
| | | | | 変化 | 10 | 15 | 2.1 | 中心 | 7 | 11 | 1.5 |
| | | | | 文 化 | 9 | 13 | 2.0 | 歴史 | 7 | 11 | 1.5 |
| | | | | 団体 | 9 | 13 | 2.2 | 現代 | 6 | 9.7 | 1.0 |

【図7】 韓国

90年代の「国家」2件は「韓国の国家と市民社会」と「韓国における国家と市民社会」という、きわめて相似した文字列である。「現代」と「国際化」には顕著な傾向はみられないが、要は、軍事政権時代の影響から脱し、本格的な民主化の歩みを見せ始めたリアルタイムの隣国への関心が、冷戦終結とともに変化し始めた国際関係のなかで高まったものと考えられる。

00年代の「政治」20件は、そのうち12件が「民主」と、6件が「変化」と、4件が「政党」と共起している。これは98年の通貨危機を乗り越えて、IMFの強力な介入を受けつつも相対的に安定した「民主」的な「政党」政治へと「変化」してゆく過程への関心を反映していると考えられる。「団体」9件はこうした「民主化」とともに成長した非営利団体および利益団体に言及している。

10年代の「東アジア」の出現の急増は、【図2】にも見えるように、日本の市民社会言論の全体の傾向（33件）でもある。「韓国・朝鮮」との共起18件はその54.5%にあたる。この18件は、この時期に〈東アジアの〇〇〉と銘打った学術イベントや逐刊の特集が多く組まれるようになったことを反映している。

まとめれば、90年代以降の日本の市民社会言論における「韓国・朝鮮」への関心は、軍政から「民主」化への「変化」のなかの隣国の人々の暮らしか

| 1990s | | | | 2000s | | | | 2010s | | | |
|-------|---|----|-----|-------|----|----|-----|-------|----|-----|-----|
| ngo | 2 | 25 | 1.7 | アジア | 12 | 27 | 0.9 | アジア | 21 | 34 | 1.2 |
| 編成 | 2 | 25 | 3.0 | 日本 | 11 | 25 | 1.3 | 日本 | 19 | 31 | 1.7 |
| 成立 | 2 | 25 | 3.0 | 現代 | 7 | 16 | 1.9 | 関係 | 14 | 23 | 1.9 |
| 歴史 | 2 | 25 | 1.7 | グローバル | 7 | 16 | 1.3 | 東アジア | 11 | 18 | 1.3 |
| アジア | 2 | 25 | 0.9 | 市場 | 6 | 14 | 1.5 | 国家 | 9 | 15 | 1.6 |
| | | | | 経済 | 6 | 14 | 1.5 | 韓国・朝鮮 | 9 | 15 | 1.1 |
| | | | | 国家 | 6 | 14 | 1.4 | 制度 | 8 | 13 | 2.0 |
| | | | | 関係 | 6 | 14 | 1.1 | 形成 | 8 | 13 | 1.8 |
| | | | | 韓国・朝鮮 | 6 | 14 | 1.0 | 歴史 | 8 | 13 | 0.9 |
| | | | | 企業 | 5 | 11 | 3.0 | 可能性 | 7 | 11 | 1.7 |
| | | | | アメリカ | 5 | 11 | 3.0 | 課題 | 7 | 11 | 1.5 |
| | | | | 変容 | 5 | 11 | 2.6 | 民主 | 7 | 11 | 1.1 |
| | | | | 役割 | 5 | 11 | 2.3 | 思想 | 6 | 9.8 | 2.4 |
| | | | | 視点 | 5 | 11 | 2.3 | 展開 | 6 | 9.8 | 1.8 |
| | | | | 課題 | 5 | 11 | 1.5 | 現代 | 6 | 9.8 | 1.1 |
| | | | | 東アジア | 5 | 11 | 0.8 | ngo | 6 | 9.8 | 0.7 |

【図 8】 中国

ら、そのプロセスにおける全体と個をつなぐ新しい媒介諸制度としての民間諸「団体」の動向へ、そして朝鮮半島と日本を含む東アジアというフレームのなかでのそれへ、と変化してきた。

5. 6 2010年代の「中国」

「中国」は2010年代に特異な頻出を記録しているが、その頻出は1990年代から始まっている。【図 8】は90年以降「中国」と頻繁に共起した語句のリストである。90年代には「編成」「成立」など、00年代には「企業」「アメリカ」「役割」など、10年代には「制度」「思想」などが特異に共起している。

90年代の「編成」2件と「成立」2件はいずれも1993年から94年にかけての雑誌『歴史評論』（522,527）の特集「『近代』の成立と社会的編成」からの出現である。これらの記事は19世紀の中国都市におけるアソシエーション的な諸制度について論じている。

00年代の「企業」5件のうち、2件が中国における企業と非営利団体との関係を主題としており、ほかは「中国における日本企業」、中国における「国家と企業」、中国における「企業の社会的統治」を主題としている。

00年代の「アメリカ」5件の内訳は「アメリカ・欧州・中国・日本の会社法制」, 「パックス・アメリカーナ後のアジア太平洋秩序: 日中関係の文化摩擦とアイデンティティ・ポリティクス」, 「中華地域世界システム／U.S. セントリック・システム／日本」, 「企業とNPOのパートナーシップ」, 「米中関係と東アジアのグローバリゼーション」である。これらは、中国が米国、欧州とともに世界の政治経済秩序の1つの極として認識され始めたことを示唆していると言える。

00年代の「役割」5件の内訳は、2件が「市民社会の役割」であるほか、「NPOの役割」, 「知識分子の役割」, 「国家の役割」が1件ずつである。2件の「市民社会の役割」における市民社会は明らかに非営利組織を指しており、5-3に論じたのと同じ動向と考えられる。

10年代の「制度」8件の内訳は、「法制度」2件, 「信訪制度」2件のほか、「政治制度改革」, 「公民社会の制度」, 「学校における人権教育の制度化」が各1件である。これらは、経済成長のなかで生じた諸課題の処理に一定の規矩を与えられてきたことを示唆していると言える。

10年代の「思想」6件の内訳は、「『私には敵はいない』の思想」, 「21世紀の思想課題」, 「東洋的民主政…の思想」, 「海洋戦略と多国間・周辺外交の思想」, 「多様かつ複雑な思想的背景をもつ中国の市民社会論」, 「東アジアの平和と憲法九条・キリスト教非暴力の思想の可能性」である。共通点は一見ないようにも思われるが、上の「制度」と考え併せると、改革開放の開始から高度成長の終焉までを総括し、今後を展望するための考え方の指針が求められる時代が到来しつつあることを示唆しているようにも思われる。

5. 7 2010年代の「取り組み」

市民社会言論全体で61件に出現する「取り組み」には、計画や展望などと異なり、〈すでに実行している〉という含意がある。これが市民社会言論において特異な頻出を見せるのは2010年代であり、2000年に先立つ用例は図書に1件（1992年）、逐刊に1件（1998年）を見るのみである。5.1に論じた、存在する市民社会のヴァリエーション生成、5.3に論じた、「非営利団体」の役割の拡張、そして5-4に論じた非＝国家「ガヴァナンス」がすでに作動してい

ることが、2000年代以降多く報告されるようになる。そうした「取り組み」の主要な指示対象の内訳は、反戦・軍縮15件、人権・児童保護・緊急人道支援6件、成人教育6件、自然災害の被災者支援5件、企業・雇用倫理5件、地球環境3件などである。

6 結び

大畑（2015）は1990年代後半以降の日本の新しい市民社会言論を、a）それを肯定的に捉えるもの、b）それを批判的に捉えるもの、c）旧来の、営利企業としての市民社会の負の性質の克服を標榜するものに分類した。

この分類は1990年代後半以降の市民社会言論が、それ以前とは異なり「ともかくも市民社会と言えるものがある」（大畑2015:71）という前提に立っているとみなす場合、非常に包摂性が高いと評価できる。a）でなければb）に違いなく、それでも包摂できなければc）がある。ただし第4章に確認したように1990年代に先立つ議論のなかには実在としての市民社会を捉えていた理論伝統が存在していた。また5.1、5.2に指摘したように、1990年代後半以降に至ってもなお、理念的な、市民社会生成待望論は存続していた。

b）のように市民社会を批判の対象とする議論は、その市民社会を不在とみなすわけがないし、a）のように好意的に捉える議論は、しばしばその市民社会なるものに、実態に関わりなく自らの期待や思い入れを託しがちだ。思い起こせば、言論の対象となる或る社会や集団の存在と不在は、エミール・デュルカームが社会なるものの〈一種独特の実在〉としての性質を指摘して以来、素朴に弁別できる事柄とはみなしやうがなくなっている。或いは特定の〈一種独特な非在〉を〈一種独特の実在〉として認めるよう、それを認めない人々に向けて説得することこそが、正しい言語の使用法をめぐる闘争としての社会的諸研究の本質とも言える。

ならば次の課題は、これら市民諸社会の、言論における生成の局面に、〈一種独特な非在〉を〈一種独特の実在〉へと変換しようとする闘争の痕跡を検出することであろう。

【資料リスト】

- 朝日新聞社編, 1969, 特集「公害問題と市民社会」『科学朝日』29 (6).
- エコノミスト編集部, 1997, 特集「頭取の犯罪——市民社会にとって銀行の『悪』とは何か」75 (31).
- 現代評論社編, 1976, 特集「日本の市民社会とロッキード狂騒曲」『現代の眼』17 (11).
- 現代の理論社, 1970, 特集「市民社会とマルクス主義」『現代の理論』7 (11).
- 現代の理論社, 1973, 特集「共同体・市民社会・社会主義」『現代の理論』10 (1).
- Hegel, G.W.F., [1821] 1974, *Vorlesungen über Rechtsphilosophie 1818-1831*, K.H. Ilting (ed.), Stuttgart, Frommann-Holzboog. (=2000, 長谷川宏訳『法哲学講義』作品社)
- 樋口耕一, 2004, 「計算機による新聞記事の計量的分析: 『毎日新聞』にみる「サラリーマン」を題材に」『理論と方法』19 (29).
- 平子友長, 1998, 「市民社会概念の歴史」『法の科学』27.
- 平田清明, 1969, 『市民社会と社会主義』岩波書店.
- 平田清明「社会主義と市民社会」『世界』267, 1968 年
- 本間義人, 1994, 『まちづくりの思想: 土社会から市民社会へ』有斐閣選書.
- 法学セミナー編集部, 1996, 特集「市民社会の安全と法を検証する」『法学セミナー』494.
- 石田雄・姜尚中, 1997, 『丸山眞男と市民社会』世織書房, 6-37.
- 磯村英一, 1969, 「被害者意識から防衛権利意識へ 変る生活環境と " 慣性の法則 " 」『科学朝日』29 (6).
- 関東学院大学経済学会編, 1971, 特集「市民社会と社会主義」『経済系』86.
- Kocka, Jürgen., 2002, 'Civil Society and the Role of Politics', Gerhard Schröder et al. (Hrg.), *Progressive Governance for the XXI Century*, Hague: Nijhoff, 27-35.
- 児玉定子, 1959-60, 「イギリス市民社会 (19 世紀前半) の食事様式」『学苑』235, 237, 239.
- Locke, John., [1689] 1970, *Two Treatises of Government*, Peter Laslett (ed.), Cambridge (UK): New York: Cambridge University Press.
- 丸山邦男・いいだも「日本の市民社会の自壊」特集 日本の市民社会とロッキード狂騒曲」『現代の眼』17 (11).
- Marx, Karl., [1859] 1934, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Volksausgabe, Marx-Engels-Lenin-Institut (Hrsg.). (=1949, 菅間正朔訳『経済学批判』春秋社.)
- Riedel, Manfred., 1975, 'Gesellschaft, bürgerliche', *Geschichtliche Grundbegriffe*, Otto Brunner et al. (Hrg.), Bd 2, Stuttgart: Cotta, 719-800. (=1990, 河上倫逸・常俊宗三郎監訳, 『市民社会の概念史』以文社.)
- 中村元, 1957, 「インドにおける市民社会の問題」雑誌『心』10 (2), 10 (3).
- 日本評論社編, 1974, 特集「ごみ処理——市民社会成立の鍵」23 (2).
- 小野寺研太, 2015, 『戦後日本の社会思想史: 近代化と「市民社会」の変遷』以文社.
- 大畑裕嗣, 2015, 「『日本における市民社会』をめぐる研究動向 1957-2013——定期刊行物掲載論文の概観——」『明治大学心理社会学研究』10.

蠟山政道, 1967, 「大衆社会から市民社会へ」『自由』(9.4).

齋藤圭介, 2013, 「戦後日本の社会学者は何を考えてきたのか——日本社会学会『会員名簿』専攻分野の推移と『社会学評論』掲載論文題目の分析から」関東社会学会第61回大会, 於一橋大学.

左古輝人, 2017, 「近世英国における Society の形成——テキストマイニングによる分析——」『社会学評論』68 (3).

作田啓一, 1966, 「市民社会と大衆社会」『思想』507.

出版年鑑編集部編, 1948-2009, 『出版年鑑』出版ニュース社.

Smith, Adam, [1776] 1986, *The Wealth of Nations*, 2vols, Faksimile-Ausgabe der 1776 in London erschienenen Erstausgabe, Darmstadt: Wirtschaft und Finanzen GmbH.

竹内芳郎, 1970, 「われわれにとって『資本論』とは何か——平田清明「市民社会と社会主義」をめぐって」『思想』550, 551, 552.

植村邦彦, 2010, 『市民社会とは何か 基本概念の系譜』平凡社.

渡辺雅男, 2009, 「日本における市民社会論の系譜」『一橋社会科学』6.

渡邊憲正, 2017, 「市民社会概念の両義性について」『経済系』270.

The Term ‘Shimin Shakai (Civil Society)’ in Japan: A History of an Idea Using Text Mining Techniques

Teruhito SAKO

Doctor of Sociology

Professor, Tokyo Metropolitan University

The semantic history of the term Shimin Shakai (Civil Society) is one of the most important keys to understand modern Japanese social thoughts in general. This paper clarifies the process of the metamorphoses of Civil Society, by using text-mining techniques. Text-mining is a general name for the statistical analyses of natural language texts. In this paper I measure occurrence frequency and co-occurrence frequency of the term ‘Civil Society’ in Japanese book titles and periodical article titles, decade by decade.

First of all, from 1930s to 1950s, Civil Society was strongly associated with ‘Marx’ , ‘Hegel’ , ‘Locke’ , and ‘Smith’ in the publication titles. This suggests that the earliest Japanese conception of Civil Society was predominantly affected by a Marxist view of bürgerliche Gesellschaft. That is to say, on the one hand, Japanese socialists understood Civil Society as equivalent to ‘system of greed’ to which the modern industrial capitalism necessarily gives rise. According to them, Civil Society should be surmounted by labor class revolution. On the other hand, liberalists found the ethos of Civil Society in the writings of John Locke and Adam Smith, claimed that Japanese should realize the voluntary association of the people who is free and equal.

In 1960s, ‘Taishu Shakai (Mass society)’ co-appeared with Civil Society frequently. This indicates that the liberalists found the Japanese society as affluent, politicized, and electronically mediated mass of people. Masamichi ROYAMA, and Eiichi ISOMURA among others argued Japanese Civil Society should be modified as

voluntary civic organizations who mediate the mass and the ruling elites.

From late 1960s to early 70s, 'Kiyoaki HIRATA' co-appeared with Civil Society frequently. HIRATA was one of the non-traditional Marxists who understood Marx's vision of proletariat revolution as it must be the self-realization of the modern Western liberal democratic ethos. And many Japanese intellectuals found that it is meaningless to plot socialist revolution in Japan anymore.

From late 1970s, the co-appearance of 'Gramsci' with Civil Society grew. Antonio Gramsci was of course a socialist, but his conception of '*società civile* (civil society)' was quite similar to the 1960s Japanese liberalist's, i.e., the mediating institutions that are not identical both with the ruling elites and mass.

From 1990s until 2010s, Civil Society has been well adapted to the volatile situation of Globalization, and working as a major conceptual tool to monitor our social world. Why is it? The Japanese cultivated their conceptions of Civil Society to meet their own needs. It is a theoretical amalgam of neo-Gramscian and liberalist traditions, but it became their own blood and flesh through their historical experiences.